

最初に出逢った日のように
～一片丹心・300年の恋～
【後宮悲歌・これが本当の完結編】

東めぐみ

運命は巡る

華英（ファヨン）は左腕の時計を覗き込み、小さな溜息を零す。更にその後で間を置かず右手で傍らの携帯電話を引き寄せ、二つ折りのガラケーを開き覗き込んだ。

今、ケータイの待ち受け画面に表示されている時刻は三時に五分前だ。あと五分すれば、この退屈な歴史学の講義からも解放される。ファヨンは思わず洩れそうになった欠伸を辛うじて飲み込む。刹那、はるか上段で熱心に講義している教授と眼が合ったような気がして一というよりは、睨まれたような気がして、咄嗟に面を伏せる。

一ああ、これだから、退屈な午後の授業は嫌なのよね。

改めて自分に向かない歴史の講義なんか選んだ自分の愚かさに自分で腹を立ててみる。この講義を選択したのは、そもそもは親友の美絵に唆されてのことだ。桂木美絵はファヨンの一番の親友である。女子高時代からの付き合いで、彼女は大の韓流ファンなのだ。

何でも、美絵の母親が昔のヨンさまの『冬のソナタ』を夢中になっているのを見て、美絵も興味を持ったのがきっかけだという。母親がとうに興味を失った今も、美絵自身はせっせとレンタルで借りてきては韓国のドラマを見ている。その美絵が『経済学部的一年生にイ・ジュンギに似た美男子(イケメン)がいる、と騒ぎ、彼が一般教養で歴史学を専攻するという噂を聞きつけたのが運の尽きだった。

美絵から歴史学を一緒に受講しようと誘われ、さして考えもせずに付き合いのつもりで受講したのだが、やはり、つくづく自分には向かないジャンルだと毎度ながら思う羽目になる。一それほどに退屈極まりない。

ところが、である。その肝心の美絵といえうば、入学早々に入った他校との合同テニスサークルで早々と彼氏を見つけて、出席も取らないこの講義に参加したのはほんの数度だけ。真面目だけが取り柄のファヨンは結局、毎回出席して、自分のためだけでなく美絵に見せるためにもノートを取るようになった。

歴史学といっても、この講義は中世ヨーロッパと時代を限定しての講義であり、更にファヨンには馴染みも薄い。これがせめて祖国の韓国辺りの歴史だったならば、もう少しは真面目に耳を傾けようという気にもなったのに。

あと五分、あと五分。と呪文のように心で呟いているファヨンはふと誰かの視線を感じた。誰かが自分を見ている？ 思わず横を振り向くと、やはり若い男が自分を見つめていた。漆黒の闇を集めたような瞳は切れ長で、どこまでも深い。この講義に出席しているということは、彼も一年か二年なのだろうか。

彼と視線がぶつかり、ファヨンは慌てて視線を元に戻した。何なのだろう、この気持ちは。急に心臓が騒がしくなり、頬が熱くなったのは、彼がかなりのイケメンだからだろう。ファヨンは勝手に結論づけて、努めて何でもないといい様子で前に向いていた。こういうときは講義中なのが逆に幸いする。さも講義に集中しているふりを装えば良い。

ファヨンが前を向いても、彼はまだ熱心に彼女を見つめているようだった。心臓はますますヒートアップし、頬は恐らく紅くなっているだろう。何とも居心地が悪く、ファヨンは一刻も早く彼の視線から逃れたかった。

ほどなく、終業を知らせる音楽が広い講義室に鳴り響いた。ファヨンは心から助かったと思い、即座に立ち上がり、足早に講義室を出た。

それにしても、と改めて思う。先刻、自分を一心に見つめていたあの男。こんな地方の田舎町ではついぞ見かけないほどの美男だった。彼の前では、美絵いわく `H大のイ・ジュンギ、も色褪せるのは間違いない。

ーイ・ジュンギというよりはイ・スンギに似てるわ。

と、在日三世の癖に韓流ドラマは殆ど見ないファヨンは考えた。よくよく考えてみれば、あんなイケメンが自分みたいな冴えない女の子に興味を持つはずがない。こちらを見ていたと思ったのは錯覚だろうし、仮に見ていたのだとしても、その向こうの誰か別の美人を見ていたのに違いない。

親友の美絵と違い、自分はどこまでも地味だ。これまでだって、美絵と並んで歩けば、ファヨンはいつも引き立て役だった。美絵はモデル並みのプロポーションだし、顔もAKBにでもいそうなほど可愛い。高校時代だって、いつだって彼氏がいた。それに引き替え、自分は生まれてからいまだかつて、男の子に声をかけられたこともないのだから。

チビで平凡な顔立ちで、性格も暗めのファヨンは女子大生になった今も目立たない存在であることに変わりはない。周囲の同級生たちに次々に彼氏ができているのをいつも眺めているだけなのだ。別に、そのことを悔しいと思ったことも不幸だと思ったこともない。

自分にはいつか自分にふさわしい、ファヨンの良さを理解してくれる男性が現れるはずだ。一人間には身の丈に合った暮らしを望むことが大切だよ。

ずっと昔に韓国から夫婦二人だけで日本に渡り、この国に帰化した祖母(ハルモニ)がいつも幼いファヨンに言い聞かせていた。ちなみに祖父はもうかなり前に亡くなり、祖母は今も健在である。日本にやって来た祖父母は北のこの地方都市に根を下ろし、ファヨンの家は二代に渡って小さな韓国料理店を営んでいる。店は常連客も多く、何度か韓流ブーム華やかなりし頃にグルメ雑誌にも取り上げられたこともあり、若い客も多い。

ファヨンの母郁子は日本人と結婚した。一人息子だった父を手放すことに、父の両親は猛反対したらしいけれど、入籍するより前に母が妊娠してしまったため、やむなく父が崔家に婿入りすることを許したそうだ。ファヨンはずっと`崔田(さいだ)彩菜、と名乗っているが、それは日本名で、韓国名は`崔(チェ)ファヨン、だ。自分では韓国名の方が気に入っているの、両親も祖母も親友の美絵もファヨンと呼ぶ。

ファヨンは高校卒業と同時に自宅を出て、大学にも近いワンルームマンションで一人暮らしを始めた。自宅を出たといっても、私鉄の駅で三駅乗り継いだ先がそうなのだから、帰ろうと思えば、いつでも帰れる。今年の春にキリスト教系のH大学文学部英米学科に入学したばかりの十八歳である。

若い夫婦だけで祖国を離れ遠い日本にやってきた祖母は根っからの苦労人だ。三世で韓国に行ったこともなく、生まれも育ちも日本のファヨンは外見も中身も日本人そのものなのに対し、祖母は考え方はいまだに韓国人であると感じることが多い。

ファヨンは今、日本と韓国と両方の国籍を持っているが、二年後の成人のときには、どちらかを祖国として選ばなければならない。ずっと昔から、ファヨンは日本を選ぶつもりでいた。韓国に行ったこともなく、韓国語さえ喋れない自分が韓国籍を取得しても意味はないように思えたからだ。

もちろん、韓国を祖国として尊ぶ気持ちは一生忘れないつもりだけれど、自分が生きていく場所はここ(日本)しかない。

今日は夕方から美絵と待ち合わせて夕食を一緒に取る予定だ。また例の彼氏の惚気話を聞かされるのかと思うと、正直うんざりしてしまう。女同士の友情はどちらか片方に彼氏ができると、なかなかうまくいかなくなると聞いたことがあるが、あれはやはり本当なのかとも思う。

美絵は同じH大学でも経済学部で、普段は共に行動することも少ない。たまに逢えば、本当はもっと別の話がしたのに、美絵は最近はずっと彼氏の話ばかりだ。その惚気を根気よく聞くのが苦痛だと感じる自分はやはり、心が狭いのだろうか。親友が幸せそうなを見て、素直に歓べない自分はやはり嫌な女？

またしても自己嫌悪に陥りそうになり、ファヨンは大きな溜息をついた。

翌日の昼休み。ファヨンはまたしても沈んだ気持ちで大学のキャンパスを歩いていた。昨夜はさんざんだった。久しぶりに親友とゆっくりと語り合えると愉しみにしていたのに、何と現れたのは美絵だけでなく、美絵の彼氏と更にその男友達も一緒だったのだ！

どうやら美絵が余計な気を回してくれたらしく、彼氏の親友をファヨンに紹介してくれるつもりだったらしい。もちろん、その場で断れば美絵や彼氏、その友達だという男性を傷つけることになる。だから、それなりに愉しく過ごして別れる段になり、ファヨンはそっと美絵に耳打ちした。

—もう二度とこんなことはしないでね？ 私は今のところ、誰とも付き合うつもりはないんだから。

それでも、その男友達はファヨンをマンションの前まで送ってきてくれた。良かったら付き合っただけで欲しいと言う彼に対して、やんわりとでも断るのはなかなか勇気の要ることだった。

まさか彼が自分を気に入るとは思っていなかっただけに、愕きで言葉もつかえてしまって、さぞみっともかったはずだ。相手の男性は美絵の彼氏には及ばないけれど、そこそこのイケメンだし、何より誠実そうだった。

ファヨンはこんな時、誰もが使う言葉を使った。

—ごめんなさい。折角ですけど、私にはもう好きな男(ひと)がいるんです。

相手の男性もそれですんなりと納得してくれたようだし、付き合う気もないのに、相手に気を持たせるようなことはするべきではない。なので、これで良かったのだ。

が、自分でも不可解に思えたことは、好きな男がいると口にした瞬間、あの歴史学の講義で自分を不躰に見つめていた男の貌を思い出してしまったことだった。

馬鹿みたい。ファヨンは自分を嗤った。あのイケメンはたいした意味もなく自分の方を見ていただけなのに、そこに何か深い意味を見出そうとするなんて。

自分では自覚がないけれど、やはり自分は美絵や他の女の子たちのように恋人と愉しく時間を過ごしたいという願望があるのかもしれない。だから、好きな男という言葉だけで、連鎖的によく知らないゆきずりの男のことなんか思い出してしまうのだ。

ますます自己嫌悪に陥りそうな気がして、ファヨンは勢いよく首を振った。

—いけない、いけない。

今日はこれから英文購読Ⅰの担当准教授のところにお祝いを持参することになっている。篠田准教授は三十歳、ファヨンが所属する英語劇サークルの顧問でもある。そのせいで、あまり接触がないのが当然の学生と教授でありながらも、親しく話をすることが多い。

篠田先生は今風のイケメンとはお世辞にもいえない。しかし、優しくて、講義もわかりやすいと学生には人気がある。その篠田先生が翌六月に結婚するというので、英語劇サークル一同でお祝いを贈ることになった。

話し合った結果、部長のファヨンが（地味なサークルなので、部員数がとにかく少なく、一年の女子ばかりがたったの五人だ。ファヨンはくじ引きで外れて部長になった）副部長の女の子と一緒に今朝、買いにいった。本当は二人で渡す予定だったのだが、その子が急用とかで、ファヨンが一人で代表として渡すのだ。

ファヨンは今、鉢植えの桜草を後生大切に腕に抱えていた。買ったのはH大近くの私鉄のH駅地下の結構大きなフラワーショップだ。そこで二人が選んだのは桜草の鉢植えだった。素朴な素焼きの鉢に可憐な花が寄せ植え風に幾本も植わっている。それを透明なセロファンと薄紅色の和紙でラッピングして貰い、ピンクの大きなリボンをかけて貰うと、それなりに品の良い豪華なプレゼントになった。

ファヨンは気ぜわしい気持ちで腕時計を覗く。

「いけない、もう次の講義が始まっちゃう」

眩き、足を速める。そのときだった。向こうから走ってきたらしい人影とまともに衝突し、ファヨンは後方に飛ばされて無様に尻餅をついてしまった。

「い、痛い」

「う、痛ー」

向こうも相当痛かったのか、呻いている。先に立ち上がったのは相手の方だった。

「ごめん、大丈夫？」

そこでファヨンも漸く我に返り、立ち上がった。

「いえ、私の方こそ、ごめんなさい」

ファヨンはまだ痛む足腰をさすりつつ、相手に詫びた。そこで、ファヨンは小さな悲鳴を上げた。

「大変、桜草が！」

ぶつかった衝撃で当然ながら鉢は遠方に飛んでいる。ファヨンは狼狽えて鉢に駆け寄った。動転のあまり、痛みも忘れていた。

鉢は辛うじて無事だったが、包みが破れ数本の桜草の中、二本が折れて、おまけに花も幾つか取れていた。

「ああー、どうしよう」

ファヨンは泣きそうになった。これは部員皆がお金を出し合って買った大切な先生への贈り物だ、それを無駄にしてしまったからには、今度はファヨンが同じものを買って先生に贈らなければならない。

「本当に濟まない。大切なものなんだろう？ 俺が弁償するよ」

その深い声にいざなわれるように、ファヨンは顔を上げた。その視線の先にいたのは何と、あの青年だった。昨日、歴史学の講義でファヨンを見つめていた男である。

彼の黒い澄んだ瞳が真っすぐにファヨンを見つめている。

一私、この男(ひと)を知ってる？

たった今、彼と視線を合わせた時、既視感(デ・ジャ・ヴ)を感じた。いや、それは昨日、初めて逢ったからというわけではなく、もう随分前から自分はこの男を知っていて、そして、過去にこういう光景一彼とぶつかってしまい慌てた経験があるように思えてならなかった。

それは確かな記憶だった。そんなはずはない、これほどあり得ないことはないのに、ファヨンの中で自分はこの男に逢ったことがあり、いつかどこかで彼とこんな風にしてぶつかったという想い出は紛れもない真実として認識されていた。

その刹那、ファヨンの臉にある光景が浮かんだ。

私はあの日もこうやって庭を歩いていた。あの時、私は腕に桜草ではなく、山のような書物を抱えていた。あまりにもたくさんの書物を持っていたせいで、前方がよく見えていなかった。

当然、息せき切って走ってくる人物と私はまともに衝突してしまった。誰かとぶつかったせいで、私は思いきり後方にはじき飛ばされた。

一い、痛。

みっともなく尻餅をつき、腰を地面にこれでもかというほど打ちつけてしまったのも、今と同じだ。

一うっ、痛一。

向こうでも同じようなうめき声が上がっている。先に立ち直ったのは、相手の方が早かった。

一済まぬ！ 大丈夫か？

私は首を振った。

一はあ、たいしたことはありませんが、あなたの方こそ。

そこでハッとして、私はとても狼狽えたはず。

一大変、書物が。

大切な書物を包んだ風呂敷が解け、本が辺りに散乱している。私は狂ったように我を忘れて本を拾い集めた。

ここで記憶が途切れた。

またすぐに次の情景が浮かび上がる。

私は彼に抗議したのだ、大切な本なのに、こんなことになって、どうしてくれるのだと。その側で彼もまた地面に這いつくばって、何かを一生懸命に拾い集めていた。

一何をしているの？

私が声をかけると、すぐに返事があった。一見てのとおりだ、私も拾いものをしている。

そのひとことで、私は初めて知った。ぶつかった弾みで荷物を落としてしまったのは何も自分だけではないようだ。男が拾い集めているのは、地面いっぱいには散らばった桜草であった。傍らに忘れ去られたように、ぽつねんと籠が転がっていた。恐らくは、この籠に桜草を入れて運んで

いる最中だった？

—桜草？

問いかけても、今度は返事はなかった。男はただ黙って花を拾い集めては籠に戻す作業を繰り返していた。

私はきつく唇を噛みしめ、うなだれた。

—ごめんなさい、私ったら、自分のことしか考えられなくて。

私は急いで自分も桜草を拾い続けたんだわ。そんな私を彼がちらりと見て、また桜草を拾い続けた。

—そなたのお陰で元どおりになった。

男が破顔した。その瞬間—。

ふいにキーンと金属質な音が耳奥で鳴り響き、鈍い痛みが頭を走った。ファヨンは思わず両手で頭を抱え、その場にうずくまった。

「大丈夫か？」

誰かの声が降ってくる。気遣わしげな声、そう、私はこの声の持ち主を知っている。けれど、どこでいつ彼に出逢ったのかまでは思い出せない。現実には彼と私は昨日出逢ったばかりで、互いにそれまでその存在すら知らなかったというのに。

こんなことが、世の中にはあるのだろうか。

しばらくして漸く耳鳴りと頭痛が治まり、ファヨンは恐る恐る顔を上げた。ふと心配そうな彼の黒い瞳を見つめた時、魂までも吸い込まれそうになり、ファヨンは狼狽した。

胸の鼓動がまた速くなった。彼はずば抜けて背が高い、身長百八十cmくらい？ すんなりとした身体にはほどよく筋肉がついていて、スポーツでもしているのか、均整が取れている。

顔はどこまでも綺麗に整っていて—。ファヨンが彼に見蕩れていると、

「どうかした？」

優しく問われ、ファヨンは首を振った。

「何でもないの」

昨日が初対面の相手に「私はあなたにずっと前、逢ったことがありますか？、なんて訊けば、そのままどん引きされそうだ。

と、相手は思いもかけぬことを言って、更にファヨンを驚愕させた。

「どこかで俺は君に逢ってない？」

「—」

ファヨンは息を呑んだ。今、まさに自分が感じていたことを彼もまた、感じていた？ しかし、ここで素直に「はい、と言えるはずもない。自分がこんなイケメンに興味を持たれるはずもないのは判っているけれど、新手のナンパという可能性も棄てきれない。或いはモテそうではない女の子をからかっているのかもしれない。

ファヨンは意識を半ば強引に眼前の男から桜草に引き戻した。

「実は、これは篠田先生への結婚祝いだったの」

男は眼を見開いた。少し眉を寄せて思い出すような表情をする。またファヨンの心臓が撥ねた。イケメンは、どんな表情をしても素敵なのだ。

「ああ、英語の先生だよね。俺も一般教養の方の英語で習ってる。へえ、篠田先生って、結婚するんだ」

そこで口をつぐむ。

「でも、これじゃ、お祝いにはならないよな。俺が同じ物を弁償するよ。代替りのものを買って済むという話ではないけど、こうなっては解決方法はそれくらいしかなさそうだし」

ファヨンは淡く微笑った。

「良いのよ、私だって前をよく見ていなかったのだから、あなただけが悪いわけじゃないでしょう。これは私が同じものを買うから」

気にしないでねと言い、ファヨンは黙って腰をかがめた。落ちていた桜草の残骸を拾い集める。二本の桜草は根本からポキリと折れていたが、花はまだ幾つかはしっかりついている。

「これはもう使えないわよね」

ファヨンは彼に微笑みかけた。

「まだ花のついているものは持って帰って、水に挿してみたら、どうかしら。もしかしたら、まだ何日かは頑張っけて咲いてくれるかもしれないし」

男が愕いたように彼女を見る。

「持って帰って活けるのか、その花を？」

ファヨンは当然と言わんばかりに頷いた。

「ええ、だって、まだ綺麗に咲いているものもあるのよ。このまま棄ててしまうのは可哀想だわ。茎の折れた部分はきれいに取って、水に挿してあげるの」

「なるほどなあ」

男はしきりに頷いた。

「でも、取れてしまった花は、どうしようもないわね」

ファヨンは、まだ散らばっていた花だけを三つ拾おうとした。次の瞬間、男がスと手を伸ばしてファヨンの長い髪に触れた。彼女は腰まで届くロングヘアに緩くパーマをかけている。今はそのまま降ろして控えめなカチューシャを付けていた。

男の手が髪に触れたのはあまりにも一瞬のことだったから、ファヨンは声を出す暇もなかった。

「ほら、こうすれば、花も遊ぶ」

男の声が意外に近くに聞こえ、ファヨンは熱くなった頬を持て余すのに苦労した。そっと今し方、彼が手を伸ばした箇所に触ると、やわらかな花に触れた。彼が落ちた花を拾い、ファヨンの髪に飾ったのだ。

「君は優しい子なんだ」

彼が呟き、満足げに頷いた。

「可愛いよ、よく似合う」

「あー」

花をよく知りもしない女の髪に飾るだなんて、この男はとんでもない女タラシなのかしもれない。けれど、どう見ても深い瞳を湛える黒瞳は、彼がそんな良い加減な女の子を弄ぶような人

間ではないことを物語っている。

「一明姫（ミヨンヒ）」

彼がまた何か呟いたが、ファヨンには、そのか細い声で紡がれた言葉が何を意味するのか理解できなかった。女性の名前のようにも聞こえるけれど、韓国人ならともかく、日本人女性に明姫という名前はまずないだろう。

そう思った瞬間、ツキリと胸の奥に小さな痛みが走る。

一きっと、彼にはもう素敵な彼女がいるんだわ。

彼ほどの優しくてイケメンなら、彼女がいたとしても不思議ではない。きっと連れて歩いてても恥ずかしくないような、彼にふさわしい美人に違いない。私なんて、足許にも寄れないに決まっている。

「明姫」

すると、彼がまた呟いた。先刻も口にした言葉だ。

「明姫って、何？ 誰かの名前なのかしら。」

彼は小首を傾げるファヨンと目を細めて見返していた。

「君と俺はずっと昔からの知り合いだったんだ。まだ思い出せそうにない？」

ファヨンは彼から後ずさった。さっきの瞼に浮かんだ光景は依然として気になるところだが、現実として彼と自分は昨日出逢ったばかりなのである。その名前も知らない相手に向かってこんなことを言うのは、頭のおかしなイカレた男か、もしくは、最初に感じたように女の子を引っかける新しい手管としか考えられない。

男が一步近づいてくる。ファヨンは無意識の中に後ずさった。

「明姫、何で逃げるんだ？ やっと俺たちは逢えたっていうのに。君はもう俺を忘れてしまったのか？」

やっぱり、このひとは、おかしい。

自分の名前は崔ファヨンで、明姫なんかじゃない。仮に明姫というのが人の名前だとしても、初対面も同然のファヨンを勝手に別の名前呼び、しかもずっと前からの知り合いだったというなんて、気が狂っている。

「私は、あなたなんか逢ったこともないし、見たこともありません！ きっと勘違いしているか人違いだわ」

ファヨンは叫ぶなり、追いつめられた兎のように彼の前から走り去った。

彼は逃げていくファヨンを茫然と眺めていたかと思うと、力なく視線を動かした。その先にはファヨンが残していった鉢植えの桜草が淋しげに放置されている。

「君も俺をやっぱり気遣いだ、狂っているとそんな風に思うのか？ 初めて俺たちが出逢った日のように、俺にあの明るく眩しい笑顔を見せてはくれないのか？」

彼は小さく首を振り、桜草の鉢をそっと壊れ物を扱うかのように抱えた。あたかも、その鉢植えの花が彼の最愛の女性でもあるかのように。

そう、覚悟はしていたはずだった。彼女がすべての記憶を、二人が辿った日々の記憶を失っていることも。

こうして途方もない時を経て再びめぐり逢えただけでも、奇跡的なことなのだから。けれど、それは哀しすぎる。互いに夜通し、苦しいほどに幾度も求め合ったあの夜を、共に過ごした日々の幸せな記憶を彼女がすべて忘れ去っていることが、現実にはこんなにも辛くやるせないことだとは。

やっと君を見つけられたのに、君は俺のことをまるで犯罪者かストーカーでも見るような怯えた眼で見るとね。何度生まれ変わっても、君は俺を探し出して愛してくれると言った。俺も君のその言葉を信じて、ずっと待ち続けたんだ。過去の記憶をすべて持ちながら、まったく別人として新しい人生を生きるのはやり切れなかった。

けれど、今の世に生まれ変わった意味を考えて、今後こそ君にめぐり逢えるのではないかと期待していても、いつも無駄に終わった。君は俺が何度も生まれ変わって何通りの人生を送っても、眼の前には現れなかった。

不思議なことに、俺は何度生まれ変わっても、いちばん最初の人生しか憶えていないんだ。三百年もの間、転生を続けて何度となく様々な人生を生きただけで、その間のことは生まれ変わる度に綺麗になくなっていく。なのに、君と過ごした最初の人生の記憶だけは残っているんだ。

教えてくれ、俺は何のために気の遠くなるようなこの時間、幾つもの時代、転生を繰り返したんだ？ 俺はずっと君を待っていたのに、君は一度として姿を現さず、空しく三百年が経った。俺たちが共に生きた祖国から遠く離れたこの異国に君は現れた。

なのに、三百年ぶりに再会した君は俺を欠片ほども憶えていない。君の最後に残した言葉はすべて偽りだったというのかい？

俺だけが何度生まれ変わっても、君に恋をする—そういう結末だったのか？ 俺たちの恋は片想いで終わると？

最初の人生で君が居なくなった後のことを嫌が上にも思い出さずにはいられない。君がいなくなって、俺は五十年余りもの時間を無為に費やしたんだよ。

辛くて、やり切れなくて、いっそのこと君のいる天に自分も行けたならと大の男がみっともなくも毎夜、月を見ては泣いた。けれど、自分が果たすべき役割を果たすまでは死ねないと、恐らくは君も俺が王としての務めを果たすことを望むだろうと生命が尽きるまでは生きなければならないと自分に言い聞かせた。

それでも、俺は俺たちを引き合わせた運命に感謝こそすれ、恨めしく思ったことなどなかった。最後まで君が俺を想ってくれたと信じられたから。

でも、三百年の時を隔ててやっとめぐり逢えた君の瞳に、俺は映っていても、その意味はないんだ。今の君はもう俺がよく知っている君じゃない。

何度生まれ変わっても、俺を愛してくれるといったあの言葉はもう意味のないものになってしまったのか、明姫一。

過去世の記憶

それから一週間が流れた。ファヨンは親友の美絵に誘われ、S駅前通りのこじんまりとした喫茶店にいた。ここは流行りの韓流イケメンカフェだという。新大久保や鶴橋のようなコリアタウンには及ばないが、このS駅周辺もそれなりに韓流系の店が集まっている。

というのも、この辺りは在日韓国人が数多く居住しているからだ。もちろん、ファヨンの両親が営む韓国料理店「丹心」もその一角にある。丹心とは韓国語の「一片丹心（イルピョンダンシム）」から取った。これは始終、一貫して相手を愛する真心、一途さを意味する。

ファヨン自身は見たことはないが、美絵が繰り返し見たという韓流ドラマ「コーヒー・プリンス1号店」に出てくる舞台のカフェに似せて作った店だという。

美絵はこの店の常連で、週に一度は来るらしい。つくづく美絵も好きだなと思いつつ、ファヨンはさして周囲に気を払うこともなく、メニューをひろげた。特に韓流ファンというわけでもないファヨンしてみれば、何故、美絵がこうも熱心にこの店について泡を飛ばさんばかりに語るのか理解できない。

もちろん、幾ら長年の親友とはいえ、そんな失礼なことはしなかったが。人にはそれぞれ好き好きがある。美絵がここの店に来て愉しければ、それで良い。

かといって、ファヨン自身は今日は初めてで美絵に熱心に口説かれてここに来たけれど、次回からは来るつもりはない。気乗りもしない中にぼんやりとメニューを眺めていると、ふいに頭上から声が降ってきた。

「いらっしゃい。当店のお勧めはオリジナル・カフェドリンクですよ」

聞き覚えのある声に、ファヨンは弾かれたように顔を上げる。見れば、例の少しばかり頭のネジの緩んだ男が立っていた。ファヨンを明姫と呼び、知り合いだと勝手に決めつけた失礼なヤツだ。

この一週間、この男のことを忘れようとしても、何故か忘れようとすればするほど、ますます鮮烈に面影が甦り、どっかりと心に住み着いてしまった感がある。忌々しいことだ。

彼はにこやかに立っていて、先日の気まずい別れ方などなかったかのようだ。今日は私服姿ではなく、白いシャツに黒いズボンである。他の数人の店員も皆、同じ格好をしているから、大方は制服なのだろう。

このウェイターぶりがまた憎らしいことに、サマになっている。それこそ、本当に韓流ドラマに出てくる俳優といっても通りそうだ。

「一」

ファヨンは熱くなる頬を意識しながら、彼を完全に無視した。彼はそんなファヨンに気を悪くする風もなく、水の入ったグラスを二つ、ガラステーブルに置いて離れていった。

すかさず、美絵が勢い込んだ。

「なに一、俊秀(ジユンス)君を知ってるの！」

「ジュンス？」

ファヨンは聞き慣れない言葉を初めて聞くように眼をまたたかせた。美絵が幾度も頷く。

「そうよ、イ・ジュンス君。この店の看板なのよ、彼」

そこで初めて `彼、` の名前だと気づく。ファヨンはこれは良い機会だと身を乗り出した。頭のおかしい男について詳しく知りたいと思うわけではなく、これはあくまでも自分につきまとおうとする変な男について少しは知っておいた方が良さだろうと自分に言い訳しながら。

「ジュンスっていうの、あの男」

美絵はファヨンを見まじり見た。

「ファヨンはもしかして、彼と知り合いなの？」

「知り合いなんかじゃないわ。あの男、少しここがおかしいのよ」

と、ファヨンは一週間前の講義中の出逢いから、その翌日にぶつかったことまですべてを話した。だが、美絵にも彼と二度目に逢ったときに感じた既視感のことは話さなかった。そんなことを話したら、自分まで頭がおかしいと言っているようなものだ。

が、美絵は難しい顔で考え込んでいる。

「ねえ、ファヨンは輪廻転生って信じる？」

「輪廻転生？」

いきなりな話題に、ファヨンは戸惑いを隠せない。美絵は大真面目に頷いて見せた。

「仏教の考え方なんだけどね、人は何度でも生まれ変わることができるというのよ」

「肉体が滅んでも、心は残るって話？」

美絵は曖昧に頷いた。

「まあ、それに近いけど、違うともいえるわね。転生というのは同じ人が何度でも生まれ変わるってこと。人の生き死には絶えることなく続いていて輪のようだってことから、そう呼ぶのよ。その考え方でいけば、ある人はずっと生き死にを繰り返していることになる」

「何か都市伝説みたいな話になってきたわね」

美絵は口を尖らせた。

「茶化さないで、私は真剣に話してるのよ」

「ごめん」

ファヨンは肩を竦めて謝った。

「大抵の人は何度転生を繰り返したとしても、過去の記憶を持って転生はしないのよ。前の人生の記憶はすべて忘れて生まれてくるの」

「そうじゃないと、気が狂っちゃうでしょ。自分がかつて経験した人生であっても、生まれ変われば別人よ。その別人の記憶をすべて憶えていたら、身が保たないよ」

「それがね。稀に過去世の記憶をまるごと持ったまま転生する人がいるんですって」

短い沈黙が流れた。カランと温んだグラスの水の中で氷が溶けて音を立てる。その音がやけにしじまに響き、ファヨンは思わずピクリと身を震わせた。

「美絵、何が言いたいの？」

親友を見つめると、美絵は溜息をついた。

「まあ、あくまでも仮にだけど、ジュンス君がそういう記憶を持っていたとしたら、彼があなたに言った言葉だって別におかしくはないでしょう」

「やだ、何かオカルトみたい。じゃあ、美絵は私も彼も転生してまた現代に生まれ変わってきたというの？ 彼と私は過去世で知り合いだったから、彼がそんなことを言うとも？」

美絵が笑った。

「まあ、滅多にある話じゃないことは確かだけどね。けど、そういう風に考えれば、彼の話はつ

じしまが合うわ。ファッション、私がこんなあり得ないことを考えたのも、ジュンス君が眼に付く女の子にやたらと声をかけるような軽薄な男じゃないからよ。彼は立派よ。五年前に韓国からたった一人で日本に留学してきて、こうやって働きながら大学に通ってるのよ」

「彼は何歳なの？」

「お店のホームページのスタッフ紹介では二十三歳になってるわ。十八歳で韓国の高校を卒業してから日本に来たの。二十歳までは働いて学資を貯めて、それから日本語学校に三年間通って今年、H大に入学したの。何でも実家は韓国でも有名な資産家で、元を正せば朝鮮王朝の王室の末裔の血を引くとか。御曹司なのに、日本に来てから実家の援助は一切受けてないって聞いたわよ。新大久保で催されたのかしら、三年前には韓流イケメンコンテストにも出て入賞したのよ」

うっとりとする美絵の言葉をファヨンは最後まで聞いてはいなかった。美絵の話があまりにも衝撃的だったからだ。

「だからね。心と転生なんてあり得ない話を思い出したわけ。それとも、彼があなたに一目惚れしたから、適当な話をでっちあげたのかしら。その方が現実的ではあるけど、本当に彼はそんな人じゃないんだけどねえ」

イケメンコンテストで入賞してからというもの、彼には公式ファンクラブができたという。この店の常連でジュンスのファンクラブにも入っているという美絵は、彼の人となりをよく知っているようである。

それでも、ファヨンはまだ過去世だとか転生だとか、小説かドラマの中でしか起こりえない出来事を自分の身に当てはめてみる気にはなれなかった。

むろん、この世の中には、どれほど文明科学が進もうと、それだけでは解き明かせない超常現象は存在する。それを否定するつもりはないが、かといって、超常現象が再々起こるものでもないことも知っている。

ましてや、その滅多に起こりえない出来事が自分に降りかかるなんて、到底受け容れがたいことだ。

ややあって、二人の注文した飲み物が運ばれてきた。それを運んだのはジュンスではなく、別の若いウエイターだった。小柄ではあるが、これはこれで可愛らしい雰囲気女性の保護本能をかきたてるようなタイプだ。

やはり韓流イケメンカフェとして名が通っているだけに、それなりのイケメンを揃えているのだろう。

「可愛い」

思わず歓声を上げたファヨンを見て、美絵がにっこりとした。

「なかなかでしょ、味の方もいけるわよ」

二人の前に置かれたのは、エスプレッソだが、そんじょそこらのものとは違う。可愛らしいマグカップに満々と注がれたエスプレッソの表面にはそれぞれ、クマとウサギの可愛らしい絵がミルクで描き出されていた。

「これも全部あのイケメンさんたちがやるの？」

思わず訊ねると、美絵は我が事のように誇らしげに言った。

「そうよ、ここは簡単な料理も出してくれるけど、それも全部、彼らが作るのよ。たいしたもんでしょ」

しばらく二人して表面の愛らしいイラストを眺めた後、ゆっくりとエスプレッソを飲んだ。あまりに可愛らしいので、このままにしておきたいような気もした。コーヒーの方もコクがあって良い味だ。

飲み終わってしばらくまた美絵の例の彼氏自慢を聞いてから、席を立った。店内はさほど広くはなく、テーブル席が数個ほどあるだけだ。入り口にレジがあり、美絵が二人分を代表で支払った。

レジのところにはいたのはジュンスだった。

「君、ちょっと待っててくれないかな」

いきなり声をかけられ、ファヨンは愕いて彼を見返す。

「何で私が一」

あなたを待たなければならないのか？ と言いかけたその時、脇から美絵が割って入った。

「じゃ、私はこれで失礼するわ。ジュンス君、この子、私の親友でファヨンっていうの。よろしくね」

と、何故か自分で名乗るより先に美絵がファヨンの紹介をしてしまった。

「ちょっ、美絵、困るわ」

言いかけても、美絵はウインクして「頑張ってね」と囁き出て行ってしまった。

「あの、こういうのは困ります」

ファヨンが言うと、ジュンスは早口で言った。

「もう今日は上がりだから、ほんの少し待ってて」

そう言われて帰るわけにもゆかず、ファヨンは結局、彼を待つことになった。

「ごめん、待たせたね」

五分後、彼は息を切らして店の前に現れた。五月半ばのこととて、ファヨンは半袖のアイボリーのコットンワンピースを着ていた。髪はいつものようにカチューシャだけ。彼の方はウエイターのお仕着せから、赤と蒼のチェックのシャツとジーパンに着替えている。ラフな服装でも、イケメンは決まる。ファヨンなんて、どれだけ精一杯めかしこんでも、たかが知れている。世の中、美男美女は特だ。

「そういう現代的な格好も良いね」

と、少し意味不明なことを彼は笑顔で言い、二人は何となく並んで歩き出した。

「さっきのオリジナルカフェはどうだった？」

いきなり話題をふられ、ファヨンは彼を見つめた。ジュンスはさっと赤面し、わざとらしく咳払いをした。

「どうも久しぶりなんで、君に見つめられるのにも照れくさくて仕方ない。あのエスプレッソは俺が作ったんだ。でも、君が俺を嫌っているのは知ってるから、仲間に頼んで運んで貰った」

ファヨンは言葉に窮した。

「別にあなたを嫌っているわけではないわ。でも、あなた—ジュンスさんが変なことばかり言うものだから、つい」

「君にとって、今の俺は君を苦しめるだけの存在なんだ」

辛そうに言われると、迷惑を蒙っているはずの自分が何故か申し訳ないような気になってしまう。

「あ、でも、エスプレッソは素晴らしかったわ。表面のイラストも可愛かったし、味も美味しかった」

「そう？」

まるで、やっと親に褒めて貰えた子どものように彼の顔がパッと輝いた。その屈託ない笑顔にまた胸が高鳴るものの、ファヨンは無理にその気持ちを抑え込んだ。

—これはきっと彼が韓流俳優ばりのイケメンだから、胸がドキドキするんだわ。

と。

「ところで」と、彼が切り出した。

「君はファヨンっていうの？ ファヨンという名前は日本人には珍しいね」

ファヨンは彼の方は見ないで応えた。

「私は在日なの。三世よ。祖母の代に韓国から日本に来て、私の両親は今も韓国料理店をやってるわ。だから、ファヨンというのは韓国名、日本名だって、ちゃんとあるけど、私がファヨンという名前の方が好きだから」

「そうだったんだ」

ジュンスは愣きも露わな表情で頷いた。

「それで納得がいったよ。俺は生まれも育ちも韓国、生粋の韓国人なんだ」

ファヨンは笑った。

「あなたのことは美絵から聞いたわ。お店の公式ホームページに乗ってる情報だって」

「そうなんだ。でも、全部本当だよ」

これには興味があったので、訊いてみる。

「何でも朝鮮王朝時代の王室の末裔だとか」

ジュンスは少しおどけた様子で肩を竦めた。

「まあ、それも本当だけど、一体、何代前まで遡れば良いのかは知らないくらい昔の話だよ。それをいえば、今の韓国に王はいないけど、わずかに王室の血を引く人たちはそれなりにいるからね。俺もそういうその他大勢の一人にすぎない。その程度だよ」

「そうなの、それでも凄いことよね。私は在日なのに、韓国の歴史も王室にも疎いのよ。何も知らない」

「それは仕方ないだろ。生まれも育ちも君は日本なんだから」

何故かジュンスに言われると、本当にそれが些細なことに思えてくる。よく生粋の韓国の人からは言われるのだ。

一韓国人の癖に、韓国語もろくに喋れないし、歴史も知らない不届きな人たちだ。

だが、ジュンスの言うように日本で生まれ育ったファヨンは最早、日本人と変わらないどころか、日本人そのものだ。それを今更非難されても、変えようがない。

「ジュンスさんは日本語が上手なのね」

お世辞ではない。ジュンスの日本語には訛りは殆どなかった、ほぼ完璧といって良いレベルだ。

「ふふ、君に褒めて貰うと嬉しいな。これでも来日するまでは、全然喋れなかったんだよ。そんなに日本で語学留学するだなんて宣言したから、両親は猛反対したけど」

何でもないように笑う。優しそうに見えるが、芯は強い人なのだろう。

「それじゃ、君一」

ここで少し言い淀み、照れたように笑った。

名前を呼ぶのも照れるなど、独りごちた。

「ファヨンはチマチョゴリとかは着たことはある？」

「そうね、親戚の結婚式とか、お葬式とかでは着たことはあるけど」

「じゃ、抵抗はあんまりないかな」

その言葉の意味が判らないままに、いつしか二人は古びた写真館の前に立っていた。見た目は小さなコンクリートの町のどこにでもあるような昔ながらの写真館である。

「上杉写真館」と小さな看板が立っている。

「こんなところに来て、どうするの？」

物問いたげな視線で見上げると、彼は言った。

「付き合っただけいいところがある」

「何を付き合えば良いの？」

だが、彼は無言だった。

「やっぱり、私、帰るわ」

ファヨンは、この男が頭がおかしいかもしれないということを漸く思い出していた。このまま頭のおかしな男の言うなりになる必要はないのだ。だが、ジュンスの懸命な声が彼女を止めた。

「お願いだから。ファヨンを傷つけたりしないと絶対に約束する」

懇願するような響きに、ファヨンの脚はその場に縫い止められたようになった。

ジュンスがファヨンを連れて入ったのは、その上杉写真館だった。ここはファヨンも何度かは利用したことがあった。確か祖母が還暦を迎えた時、祖母、両親、ファヨンの家族全員で家族写真を撮影したことがある。

それとファヨンの七五三のときもここで晴れ着を纏って撮影した。ファヨンが来たのはチョゴリではなく、日本の子ども用の着物だった。

本当に自分たちはもう日本人と化してしまっている。ファヨン自身は韓国の昔ながらの伝統行事もしきたりも知らない。ましてや、ファヨンの父親は日本人なのだ。この身体には日本人の血も流れている。

この写真館を経営しているのは子どものいない老夫婦である。老夫婦といっても、共にまだ

六十代前半くらいだ。在日が多いこの界限では珍しく日本人である。

「おじさん、こんにちは」

入り口の自動ドアを開けると、すぐそこが控え室兼スタジオになっている。ジュンスは気軽に声をかけると、すぐに奥から目がねをかけたオーナーが出てきた。

「おお、ジュンスか」

オーナーの方も顔を綻ばせている。ジュンスが言った。

「仕事や学校に必要な証明写真を撮るときには、いつもここでお世話になるから」

顔見知りということなのだろう。

「今日はどうしたね？」

オーナーにジュンスは耳打ちをした。自分には聞かせられない話なのだろうか。またもやファヨンはよく知りもしない男の口車に乗って、のこのこと付いてきた自分を馬鹿だと思った。今からでも遅くないと踵を返そうとした時、更に奥からオーナーの奥さんまで現れた。

奥さんもオーナーと同様、雰囲気はやわらかなシルバーグレーの髪が上品な老婦人である。その奥さんに

「さ、どうぞ」

と、背中を押され、ファヨンは戸惑った。

「奥の衣装部屋へご案内しますよ」

何故、ここで衣装部屋なのかと疑問を呈する暇さえない。奥の衣装室には、ゆうに十数着はあるだろうチマチョゴリが掛けてあった。

「うちは在日の方も多く利用して下さるので、チマチョゴリも常備してるんですよ」

祖母の還暦のときは確か、ここのチマチョゴリをレンタルした記憶があるので、それは知っている。眼にも鮮やかな色とりどりのチマチョゴリを眺め、ファヨンは溜息をついた。

成長してからチマチョゴリを纏ったことはない。こんな美しい衣装を着てみたいという純粋な娘心はあった。

「さ、どれでも好きなものを選んで」

言われるままに若草色の上衣と牡丹色のチマの組み合わせを選んだ。開いた花のようにふんわりとひろがる牡丹色のチマには裾に金糸銀糸で細やかな刺繍が施されている。よく見ると、花に戯れかける蝶の柄だった。

今度は着替え室に移動し、大きな鏡のある仕切りの中で着替えた。ここは基本、メイクや着付けは自前だ。頼めば外から美容師が来てくれるが、別料金になる。なので、ファヨンは今回は自分でチマチョゴリを着た。

幾ら韓国の伝統や風習に疎くても、チマチョゴリくらいは自分で着付けられる。奥さんの薦めで、長い髪は一つに結わえて後ろでくくった。

「まあ、チョゴリがよく似合う。綺麗だわ」

奥さんのお世辞を笑顔で聞き流し、ファヨンが撮影スタジオの方に戻ると、既にジュンスがオーナーと待っていた。愕いたことに、彼自身もパジを着ている。それも現代風に改良された簡易なパジではなく、昔ながらの伝統衣装である。

ご丁寧に帽子まで被っているので、まるで時代劇から抜け出してきたイケメン俳優のようだ。その時、また一つの光景が瞼に浮かび上がった。

一頼みがある。

あの男は躊躇いがちに言った。

一なあに？ 私でできることなら。

私は彼に微笑んで応えた。

一膝枕を頼めるだろうか。

少しだけ恥ずかしげに言った彼。

一一。

私は咄嗟に言葉を失ってしまった。

見かけは真面目そうなのに、やはり、とんでもない女タラシなのかもしれない。よく知りもしない女いきなり膝枕を頼むだなんて。こういうのは普通は親密な関係にある一俗にいう深間にある恋人たちが行うものではないか。

私の心が伝わったのか、彼が酷く残念そうに言った。

一やはり、駄目だよな。済まない。埒もないことを口にした。

そのときのあの男の表情があまりに淋しげで、私は自分でも愕くべき言葉を返していた。

一ほんのしばらくなら、良いわ。

一本当か？

彼は本当に嬉しそう見えた。

私が横座りになると、彼はそっと頭を膝に乗せてくる。

一重くないか？

一大丈夫よ、心配しないで。頭だけなんだから。

私を気遣ってくれる彼に、私は明るく言った。

一膝枕なんてして貰ったのは生まれて初めてだ。

そのときのあの男の心底嬉しそうな声と表情ったら！ 最初に膝枕を頼まれたときは断らなかつたことを後悔したけれど、やはり、してあげて良かったと思った。

あの時、私は彼に頼まれて戸惑いながらも、彼に膝を貸して膝枕をしてあげた一。

軽い目眩が襲う。また、あの不快な耳鳴りがしそうで、ファヨンはきつく眼を瞑った。

「ファヨン？」

その声で、ファヨンは現に引き戻された。眼を開けると、パジを纏ったジュンスが心配そうにこちらを見ている。

「大丈夫」

ファヨンは彼を安心させるように微笑みかけた。これから何をするのかと思っていると、オーナーに呼ばれた二人は何とスタジオに仲良く並んで写真撮影をすることになった。

ポーズを変えて何カットずつか撮影して写真館を出た。写真は後日渡して貰うことになったが、ジュンスはオーナーに無理を言ってい一枚だけ携帯に画像を送って貰っていた。

写真館を出た後、二人は少し歩いて並木通りと呼ばれている大通り沿いのカフェに入った。その通りは文字通り、桜並木に囲まれている道路が長く伸びている。

五月の今は眼にも鮮やかなエメラルドグリーンの子葉桜だ。中には花水木も植わっていて、そちらはまだ薄紅色や白の花を咲かせている。

ジュンスは室内ではなく、外に幾つか置いてある丸テーブルと椅子の方に座った。店のすぐ側はオープンカフェになっている。オシャレな丸テーブルと椅子がそれぞれセットになっていた。

二人がけなので、必然的に向かい合って座ることになる。

ジュンスは注文を取りにきた若い女の子にコーヒーを頼んだ。ファヨンはメニューを見て、ミックスジュースを頼んだ。

「ケーキとかは欲しくない？ 良かったら、頼むけど」

ジュンスが言ってくれたけれど、ファヨンは首を振った。ケーキはあまり好きではない。

と、メニューにあるものを見つけた。

「あ」

声を上げた彼女をジュンスとウェイトレスが一斉に見る。ファヨンは恥ずかしくなり、小さな声で言った。

「揚げパンがあるのね？」

オシャレなパリのオープンカフェを彷彿とさせる店に揚げパンとはちょっと想像がつかないが、ケーキ類と一緒にメニューに載っているところを見れば、スイーツと認識されているのだろう。

結局、ファヨンは揚げパンを三個注文した。運ばれてきた揚げパンをファヨンはさも美味しそうに頬張る。別にジュンスと付き合いたいとか、彼に良く思われたいとかの下心もないので、彼の視線も頓着しない。

ジュンスは何故か嬉しげに揚げパンを次々と平らげるファヨンを眺めている。

「君はやっぱり、いつの時代でも揚げパンが好きなんだ？」

「え？」

ファヨンは彼の言葉の意味を理解できず、茫然と彼を眺めた。その様子に、ジュンスは微笑んで首を振る。

「いや、またこんな風にさも美味しそうに揚げパンを食べる君を見られて、幸せだなと思って」

これもよく判らないので、ファヨンはもう気にせずに揚げパンを食べた。

ジュンスはといえば、頼んだアメリカンをブラックでゆっくりと飲んでいる。純白のカップには縁にぐるりと金で繊細な蔦模様が描かれていた。

少しうつむき加減なので、長い睫が影を落としている。秀でた額から整った鼻梁と、本当に造作が美しい男だ。

一なんて綺麗な男。

つい惚けたように見とれていて、彼と眼が合った。不寐に見つめていたことを彼にずっと知られていたかのように思え、ファヨンは慌てて視線を逸らした。またしても頬が燃えるようだ。

そんなファヨンジュンスは幸せそうな表情で見つめていた。しかも、この上なく優しげな瞳で。

「物凄く綺麗だった、ファヨンのチマチョゴリ姿」

ジュンスは感に堪えたように言い、付け加えた。

「写真ができれば、また君にもあげるよ」

要らないとは何故か言えず、ファヨンはずっと気になっていたことを口にした。

「何で、こんなことをしたの？」

「こんなこと？」

物問いたげな彼に、ファヨンはひと息に言った。

「あんな格好をして写真を撮ったりなんかー」彼はジーンズのポケットからスマホを取り出した。何やら操作しているかと思いきや、いきなりそれをファヨンの前に指し示した。

「これを見て」

やはり、彼の行動は謎だらけだ。ファヨンは言われるままに、スマホの画面を覗いた。

「直宗 朝鮮王朝第〇〇代国王 一七〇〇～一七〇〇、画面の冒頭に記載されている。」

「直宗？」

朝鮮王朝時代中期の国王であろうことはファヨンにも理解できるが、何故、このことと写真撮影が結びつくのか？

「直宗は朝鮮王朝中期に生きた王だ。即位したのは十五歳だった。息子である世子(セ ज्या)が二十歳になるまで、実に四十三年にも渡って在位したんだ。よくドラマにもなってる時代だよ」

後世に生きる人たちは勝手に歴史を自分たちの都合の良いように解釈して、事実無根のドラマを作る。彼は何度も転生し、かつての自分をまったく別の人間が演ずるのを見てきたが、どれも事実とはかけ離れていた。

現実には慎み深かった最初の妻である王妃がドラマでは嫉妬深く、王の寵愛する側室を事あるごとにいびり、心優しい彼の想い人と嬪(明姫)は王を色香で誑かす稀代の妖婦になっている。

本当の王妃も明姫も違う、そんな女ではないと幾度思ったことだろう。だが、失われた歴史の向こうにいる自分たちは最早、何の発言権もなく、今、この世に生きている者たちが作る物語こそが「歴史」になるのだ。そして、やがて、何度も転生を繰り返し、幾度もドラマの中のかつての自分「直宗」を見る度に悟った。

「歴史、はそういう風に塗り替えられ、作り替えられてゆくものだ。」

「そんな王さまがいたのね。私は先ほども言ったけど、三世といっても、名前だけの韓国人なの。朝鮮王朝時代の歴史も何も判らない。中身は日本人だわ」

ファヨンは言いながら、なおもスマホの画面を眼で追った。そこには朝鮮王朝中興の祖と讃えられ、後世に至るまで民に慕われた聖君としての直宗の生涯が簡潔に示されている。

その中で、ふと一文が眼についた。

一直宗が生涯に渡って熱愛した和嬪蘇氏は、惜しくも二十一歳で亡くなった。亡くなった当時、和嬪は王の第二子を懐妊していた。死因は難産のためと記録には残っているが、最近になって毒殺説も出ている。

更に眼で追っていくと、

一直宗後宮 王妃 仁順王后・仁元王后 側室 和嬪蘇氏 温嬪曹氏 賢嬪尹氏 ○○

と、その後にもずらりと側室の名が並んでいる。

「たくさんの奥さんがいたのね」

呆れたように言うと、ジュンスが眉をつり上げた。

「何だ、その言い方だと王さまがまるで好色漢だったようじゃないか！」

「違うの？ 奥さんが二人、それから側室が何て読むのかしら、これは」

読み方が判らず困惑しているはずなのに、いきなり口からぽろりと言葉が転がり落ちた。

「和嬪蘇氏（ファビンそし）」

ジュンスがハッとしたようにファヨンを見た。

「ファヨン、君は何かを思い出してー」

と、またキーンと耳障りな音が耳奥で鳴り響いた。

瞼に向こうに懐かしい光景が現れた。

—どうしたんだ！ 泣いているのか。

あの男が慌てたように訊いてくる。

私は泣きじゃくりながら言った。

—ユンが可哀想で。私、ユンがそんなことまで考えてたって、全然知らなくて。

あれは確か、彼が私のお祖母さまに結婚の挨拶に来たときのことだ。宮殿の庭園で知り合った私たちは相思相愛になり、結婚の約束まで交わした。その日は彼が私の実家に挨拶に来ると言ったのだ。後宮女官だった私は休みを貰っていた。

私には既に両親はなく、実家には祖母がいるだけだった。お喋りで吝嗇なお祖母さまの存在が恥ずかしいと言った私に、彼が言った。

いつでも待っていてくれる家と家族がいるだけ、そなたは幸せだと。そして、彼のお母さんに振り向いて貰いたかった彼の子どもの頃の話聞いたのだ。

それで、彼の孤独な子ども時代を思うと哀しくて泣けてきたのだった。

私はあの時、泣きながら続けた。

—なのに、ユンはそんなに優しい眼をしてる。淋しかったはずなのに、いつも誰にでも優しい。私、ユンの夢を応援するから。あなたがさっき話してくれた—誰もが幸せに暮らせる身分差のない国を作るっていう夢を応援する。ずっと、あなたの側において、私にできることがあれば手伝わせて。

—明姫。

あの男が泣いている私を抱き寄せた。

—私は今、幸せだよ。こうして、生涯にただ一人の想い人にめぐり逢えた。そなたはいつもただ私の側において、笑っていてくれれば良い。

ファヨンはきつく唇を噛みしめ、両手で顔を覆った。耳鳴りが遠のくにつれて、瞼の奥の光景も薄れて消えていった。

「ファヨン、大丈夫か!？」

ジュンスが幾度も呼んでいるのも気づかず、ファヨンは緩慢な動作で彼を見上げた。

「あなたと出逢ってから、幻影ばかり見るのよ。つい今もまた私には訳の判らない幻の光景が浮かんで来て、そこで私はユンという名前の男の人と話していた」

ジュンスが身を乗り出した。

「ユン、君はそこまで思い出したんだな。それで、幻の中のそのユンという男はどんな顔をしていた？」

ファヨンは力なく首を振った。

「判らないわ。幻の中で、ユンと話しているのは自分だっていうのは判るけど、肝心の相手の顔ははっきりと見えないの。周囲の景色は鮮明なのに、ユンの顔だけは朧で」

ジュンスは明らかに落胆したような表情だ。彼は黙ってまたスマホを見せ、ある部分を指し示した。

そこには`直宗 名前は李胤、と書かれていた。またしても読めないはずなのに、言葉が口を突いて出る。

「イ・ユン。直宗の名前ね。じゃあ、私が幻で話しているのはその直宗という王さまなの？」

ジュンスは小さな溜息をついた。

「俺は物心つくかつかない頃から、妙な子どもだって言われてきたんだ」

彼の子ども時代と三百年前に実在した王さまがどう繋がるのだろうと訝しげに彼を見た。が、彼は最早、ファヨンのことなど眼中にないようだ。彼女に語って聞かせるというよりは、何かにせき立てられるかのような口調で語り続けた。

「到底、他人からは信じられない、理解しがたいようなことばかり喋って、周囲を困惑させていた」

それは今、まさにファヨンがジュンスに対して時折、感じる不安だ。ファヨンは知らず彼の問わず語りに耳を傾けていた。

「俺が三百年前の記憶を語り出したときには、母は泣き出し、父は絶望に青ざめたんだよ。実の両親すら、手を焼いて色々とクリニックに連れていったけど、何度検査しても、俺は知的にも精神的にも、どこにも異常はないと言われた」

そんな時、親戚の伯父、母の兄が母にポツリと語ったという。

一世の中には前世記憶を語る子どもがたまにいるというから、ジュンスもそれじゃないのか？

伯父はソウルの大学で心理学を教えている学者であり教授だった。前世記憶、つまり転生した者が前世の記憶をそっくりそのまま持って生まれ変わったという説だ。

俄には信じがたい話ではあったけれど、その説を信じれば、ジュンスの特異性も理解はできる。もっとも、両親はそのときはまだ、伯父の話は百パーセント本気にしたわけではなかった。

成長するにつれて、ジュンスは黙っている方が無難にやり過ごせることを憶えた。たとえ彼には当然のことであったとしても、彼以外の人間一両親さえもが一は彼の言葉を単なる気違いの妄

想としか受け取らない。

だから、三百年前の記憶も他人にはけして話さないようにした。そうすれば、少なくとも彼はごく普通の人間として周囲に受け容れられたからだ。

十二歳の時、彼はソウルではかなり名の知られた占い師のところに両親に連れていかれた。その時、あろうことか、五十ほどの女占い師はいきなりジュンスに向かって恭しく古式にのっとりた拝礼を始め、その場にひれ伏し頭を垂れた。

狼狽する両親を尻目に、占い師はそのままの体勢で怖ろしいことを告げた。

—我らが国の偉大なる王よ、こうして拝謁できたことを私めは光栄に存じます。御身の魂は三百年の時を経てもなお、安らぐことなく天に還ることなく、この現世を彷徨っておられる、何とお勞しいことでしょう。されど、ご案じなされますな、まもなく、長らく続いた果てのない輪廻も当代で漸く終わり、御身も今度こそご寿命を終えられたその暁には天へとお帰りになることができます。御身が長らく探し求めておられたお方も今、やっこの現世に転生されておわします。

女占い師は両親にはっきりと断じた。

—このお子は類い希なる貴人の相を持っておられます。このお子の上に見えるのは美しい鳳凰、夜明けの都の空を翼ひろげて悠々と舞う鳳凰です。だが、その鳳凰は血の涙を流している。これは待ち人がいまだ現れないことを示しているのです。

つまりは、ジュンスは三百年前に生きた貴人の生まれ変わりであり、前世の記憶を完全に持っている、と。

—貴人とは、一体—。

あまりの展開に言葉もない両親が声を震わせて問うと、占い師は眼を瞑った。

—この上なく、やんごとなき御身。

—それは、もしや王—。

父が言いかけ、占い師が頷くや、母はショックのあまり卒倒した。

そのときから、母はどこかジュンスに対しても隔てを置くようになった。笑顔で接してくれていても、弟妹たちのように抱きしめて頼ずりしてくれることはなくなった。

父の方はいまだに半信半疑といったところらしい。いずれにせよ、ジュンスはそのときから、自分がかつて何者であり、何のために飽きもせず転生を繰り返しているのかを知った。

中学生になった彼は図書館で様々な歴史書を読み漁り、自分の記憶が三百年前に存在した実在の国王直宗のものであることを確認した。

占い師によれば、幾度転生しようとも、ジュンスに残っているのは三百年前の最初の生を生きたときの記憶だけ。後の人生は生まれ変わる度に消えているはずだとも。

確かに指摘されたとおりのことだった。ジュンスが今、ありありと思い出させるのは三百年前、彼が偉大なる直宗王と呼ばれた朝鮮国王だった最初の生だけだ。

要するに、それ以降の幾とおりの人生も彼にとっては意味のあまりないものなのだ、ということらしい。そして、何故、転生を繰り返すほどにこの世に執着を残しているかといえば、待ち人にいまだ逢えないからというのが理由だという。

その待ち人というのが、三百年前に直宗だった彼が生涯でただ一人愛した女性和嬪こと蘇明姫なのである。それほどまでに愛した女性と何故、何度も転生を繰り返しているのに、再会できないのだろうか。

しかも、自分たちは相思相愛だった。明姫は二十一歳の若さで儂くなったが、今のきわに彼の手を握りしめて約束したのだ。

—一度生まれ変わっても、必ず殿下をお探し致します。

にも拘わらず、この三百年の間、明姫は一度として彼の前に現れなかった。明姫に逢えば、彼は必ず判るという自覚があった。魂が同一のものだからといって、姿形までかつての想い人と同じなのかは判らない。彼自身、今の自分の外見がかつての自分と同じなのか判断つきかねるからだ。

似ているといえれば似ているし、似ていないといえれば似ていないようにも思える。元々男だから、女性のように容貌に拘ったことがないせいもあるだろう。

しかし、どれだけ仮に外見が明姫と異なっていたとしても、彼(ユン)は明姫の魂を持つ人物に逢えば必ず判る。たとえ、それが男性だったとしてもだ。明姫の魂を持つ者が必ずしも女性だという保証は何らなかった。もし男性として転生していた場合、どうするのか？

ジュンスには同性愛の趣味はまったくないのだ。しかし相手が明姫の魂を持つ者なら、男性だったとしても、心がどう動くかは自分でも予測はつかなかった。

裏腹に、かつて自分が繰り返した転生の中ではもしかしたら、女性として生きたこともあったのかもしれない。しかしながら、生まれ変わる度に記憶が消えているのでは、それを確かめるすべはない。

できるならば、今度こそ誰はばかることなく愛し合える女性であって欲しいと彼は願い続けた。だが、占い師の預言にも拘わらず、一向に再会できない日々が続く中に、たとえ男として転生していても良いから、明姫に逢いたいと焦がれるほどに思うようになった。

それでも、明姫は現れない。ついにジュンスはこのまま韓国にとどまり、いつまでも逢えない恋人を待つのが嫌になった。それで十八歳の時、韓国を飛び出した。語学留学などと格好の良いことを言っているのは建前で、その実、韓国で明姫を待ち続けるのに疲れてしまったのだ。

彼が日本に行きたいと言った時、両親は反対したが、母は内心はホッとしているようだった。我が子であって我が子ではない遠い存在、しかも、どこか薄気味悪いもののように遠巻きに見ていた息子がいなくなって、安心したように見え、彼は傷ついた。

だが。逃げるように韓国を後にして、海を渡った遠い日本に来て、まさかこの地で探し求めていた明姫に逢えるとは想像だにしていなかった。今から思えば、自分が韓国を出て日本に来たのも、宿命或いは輪廻に導かれてのものだったのだろう。

彼は明姫と再会するために、日本に来たのだ。もちろん、そのことをまだファヨンは完全に理解できているはずもない。

長い話を終えて、ジュンスは何かから一恐らくは彼を縛り続けてきたものから解き放たれたような雰囲気だった。長い旅を終えたとでもいえば良いのだろうか。

彼は特に精神異常者というわけではなかったのだ。確かに根本から信じ切れる話ではないけれど、少なくとも彼なりの理由はあるのだとファヨンには理解はできた。

「ファヨン」

突如として彼に強い意思を感じさせる声で名を呼ばれ、ファヨンは眼を見開いた。

「直宗には明姫という寵姫がいた」

また、スマホの画面を見せられる。

そういえば、幻の中で直宗王は自分を明姫と呼んでいたけれど一。妖しい予感に胸がさざ波立つ。

ファヨンは頷いた。

「それがどうかしたの？」

「俺は君と過ごした日々を、幼いときから何度も記憶に甦らせていたよ。大学の講義室で初めて君を見た日も、桜草を腕一杯に抱えた君を見たときも、ああ、似たような思い出がかつて三百年前の俺たちにもあったと昔を思い出した」

「何のことを言ってるの？ あなたに三百年前の前世の記憶があるというのは信じるけれど、その話と私が何故、関係あるの？」

ファヨンは心底判らないといった風に首を振る。繰り返し見る幻はジュンスの話がまったくの偽りではないのかもしれないと彼女に告げていたが、さりとして、容易に認められる話でもない。

「君と俺は三百年前に出逢い、恋に落ちた」

ファヨンは信じられなくて、烈しく首を振った。

「馬鹿げてる。あなたの話は信じてもいいわ。でも、それに私まで巻き込むのは止めて」

「判らないのか？ 君が俺と出逢ってから時々、幻想を見るのは、そのせいだ。いや、君が幻想だと思っているのは、実は幻想なんかじゃない。君の中で眠り続けていた過去世の記憶が今、俺と出会ったことで目覚め始めているんだよ。君は確かに三百年前にかつて君自身が体験したことを思い出し、記憶の中で追体験している」

その時、一陣の風が二人の側を駆け抜けた。

オレンジ色の夕陽に照らされた桜並木が一斉にざわめき、花水木の花弁がひらひらと雪のように中空に舞った。

その花びらが数枚、ファヨンの漆黒の長い髪に降りかかる。ジュンスは手を伸ばし、彼女の肩と髪についた可憐な薄紅色と純白の花びらを指で掬い上げた。

何かを希(こいねが)うかのような瞳をこれ以上、見ていられない。

「あなた、やっぱり、頭がおかしいのよ」

ファヨンは叫び、立ち上がった。折しも黄昏れ時に差し掛かり、オープンカフェは殆ど満席だ。大声を出したファヨンを周囲の客たちが好奇心も露わに見つめている。

今の自分たちは他人にはどう見えているのだろう。痴話喧嘩をしている恋人？ そう考えて、彼女はカッと身体が熱くなった。

「夜はバーでバイトしてる。S駅近くの雑居ビルの二階、`アンダンテ、という店だよ」

彼がふいに言った。物問いたげなまなざしに、彼が薄く笑う。

「昼間はガソリンスタンド、回転寿司の店員、イケメンカフェのウェイター、夜はアンダンテのバーテン。貧乏学生は色々と忙しくてね」

やや自嘲気味に笑う彼の顔はとても淋しげで。やはり、遠い昔にこんな表情をする男を見たような気がして、ファヨンは狼狽えた。

いけない、このままでは、この男のおかしな話に自分まで引きずり込まれてしまう。ファヨンにとっては自分が三百年前に生きた国王の妃の生まれ変わりだなんて、絶対に認めたくない話だ。

だが、このままジュンスといたら、何故か彼の調子に乗ってしまいそうな気がして怖かった。

「俺はそこでドラムをやってるから、良かったら、見にきて」

その言葉を背に受け、ファヨンはその場から去ろうとした。まさに彼女が歩き出そうとするのと、彼が振り絞るように言ったのはほぼ時を同じくしていた。

「お願いだ、思い出して、明姫」

振り向くつもりもなかったのに、最後の`明姫、という呼びかけに対して、ファヨンはごく自然に振り向いていた。意図したわけでもなく、ただ、聞き慣れた愛しい男の呼びかけに応えるかのように、彼女の魂が敏感に反応したのだ。

ジュンスの瞳は哀しみに揺れていた。切なげなまなざしに心まで絡め取られそうで、居たたまれない。ファヨンは逃げるようにその場から走り去った。

恋しくて～宿命の二人～

恋しくて～宿命の二人～

その夜、ファヨンはS駅前のビルに行った。エレベーターを使って二階で降り、幾つか並んだドアの前を素通りする。目当ての店はすぐに見つかった。

安っぽいブラウンのドアには格子模様が彫り込まれている。そのドアにこれもおかにも安っぽそうなプラスチックのプレートに「アンダンテ」と印字されていた。

自分が何故、あの男に言われるがままにここに来たのか、ファヨンは自分の心を測りかねていた。ただ、夕方の別れ際、彼の切なげで哀しげな瞳が忘れられず、思い出す度に心が針で刺されるように痛んだ。

木製のドアを開けると同時に、音楽がファヨンの耳に飛び込んできた。やわらかで、ムーディな音楽がさして広くはない室内にゆったりと流れている。

店内は入って真っすぐ先の中央に小さなステージがあり、右手にカウンターとスツール、左手にボックス席、その狭間に一定の間隔を開けて、椅子が置かれている。客たちは今、思い思いの場所に陣取っているが、大半は真ん中の自由に動かせる椅子に座っていた。

舞台の奥には立派なグランドピアノが設置されている。身の丈のある妖艶な美女が静かな旋律を奏でている。年の頃は二十歳代後半くらいだろうか、デコルテを出した黒のドレスは胸許が深く開いて、乳房のきわどい部分ぎりぎりのところまで露出している。

裾部分はロングのタイトなマーメイドラインだが、スリットが太腿上部まで入りこんでおり、少し脚を動かす度に、魅惑的な白い脚がこれもきわどく見える。

ウェーブのかかった長い髪は豊かにうねり、腰まで流れている。顔は照明が暗めなので定かではないけれど、濃い化粧の下からも、くっきりとした目鼻立ちが窺える。

彼女のすぐ傍らではサクスを抱えたダンディな中年男性が熟成したワインのような深い音色を奏でている。

ジュンスは彼らとは少し離れた片隅で控えめにドラムを叩いていた。ミラーボールが回り、ジュンスの端正に陰影を刻んでいる。

時々、照明がいつそう暗くなり、小さな瞬きが静かに演奏を奏でるバンドのバッグを彩った。まるで、夏の夜に漆黒の闇夜を舞う蛍の光のようだ。

けして烈しい曲ではないのに、何故がじっと耳を傾けていると、心の奥が妖しくさざめいてくるような不思議な感じがする。

サクスがふいに鳴り止み、後はジュンスと女性のピアノだけになった。二つの音色が絡み合う。ジュンスと彼女は時々、視線を合わせ、彼らだけにしかわかり得ないコンタクトを取り合っているように見える。

ふとファヨンは胸苦しい想いに駆られた。

一彼とあの色香溢れる女性は、どんな関係なのかしら。

ジュンスとはまだ知り合ってもないのに、そんなことを考えてしまう自分が情けない。ファ

ヨンはふらふらとカウンターの方に行き、高いスツールに腰掛けた。

カウンター席は丁度ステージには背を向けた格好になる。逆にジュンスの方からは見ようと思えば、ファヨンはよく見えるだろう。

「いらっしゃい、初めてかな？」

ふいに声をかけられ、うつむいたファヨンは顔を上げた。二十代半ばほどの男が微笑んでいる。白服に蝶ネクタイといういでたちを見ると、バーテンダーなのだろう。

「こんばんは」

と、こんな大人の店に来たことのないファヨンは狼狽えて無難な挨拶を返す。

「歳は幾つ？ お酒は飲めるよね」

愛想良く話しかけてくるので、応えないわけにはいかない。

「十八歳です」

「何だ、未成年か。大人っぽいから、二十歳くらいかと思った」

そう言いつつ、彼はカウンターにさりげなくスリムな逆三角形型のカクテルグラスを置いた。蒼い海のような爽やかな色合いが涼しげなカクテルだ。紅いチェリーが添えられていた。

「魅惑的なお嬢さんに僕からのプレゼント。ソルティドッグっていうカクテル。ほんの少しアルコール入ってるけど、大丈夫だよ」

なかなかイケメンのお兄さんである。エグザイルにでもいそうなワイルド系の美男だ。

「どうぞ、喉越しも良いし、すんなりと飲めると思うよ」

優しく勧めてくれるのに、無下に断れない。ファヨンは勧められるままに、グラスを手にして、ひと口カクテルを飲んだ。確かに飲みやすい。ひと口、また、ひと口と飲んでいく中にアルコールだということを忘れて、ジュースを飲んでいる感覚になっていた。

バーテンダーはファヨンの咽をカクテルが通りすぎてゆく様を眺めている。その視線が獲物を狙う蛇のように粘着質な光を帯びているのには気づいていない。

「名前、何ていうの？」

「ファヨン」

「可愛い名前だね、君にぴったり」

どうやら、向こうは本名だとは思っていないらしい。どうでも良いことだと、ファヨンはどこか投げやりな気持ちで考えていた。その一方で先刻見たばかりのステージの様子がまざまざと甦る。ピアニストの妖艶な女性と親密な様子でしきりに視線を交わし合っていたジュンス。

まさか、あの二人は一。一瞬、ダブルベッドで全裸で絡み合う二人の姿を想像し、ファヨンは頬を上気させた。

私ったら、何を馬鹿なことを考えてるの？ 思わず両手で頬を包み込む。頬が熱い、いや頬だけでなく、身体全体が燃えるように熱い。初めて飲んだアルコールのせいだろうか。

「そのニットのワンピース、大人っぽいね。でも、身体のラインが丸見えだ。折角の綺麗な身体だから、見せても良いかもしれないけど、僕が君の彼氏だったら、僕以外の男には見せたくないかも。胸も大きそうだね」

と、最早、不躰な視線を隠そうもせず、ファヨンの胸許にあからさまに注いでくる。が、すっかり酔いが回っている彼女は男の淫らな視線にもまるで気づかなかった。

ファヨンの隣の向こうでは、微笑み交わすピアニストの女性とジュンスの姿が何度もフラッシュバックしている。やがて、その映像はミラーボールのようにぐるぐると回り始め一。

ファヨンは目眩を憶えて、片手のひらで額を押さえた。

ぐるぐる、ぐるぐる、ジュンスと微笑み交わす美女が頭の中で回る。

刹那、ファヨンは悟った。

「私はジュンスを好きなんだわ。」

彼が他の女性と愉しげに微笑み交わしているだけで、心が醜い嫉妬で染まってしまうほどに。それはファヨンがジュンスへの恋心をはっきりと自覚した瞬間であった。

「どうしたの？ 具合が悪い？」

バーテンダーがすかさず訊ね、顔をいっそう近寄せて囁いた。

「具合が悪いなら、どこか二人きりになれる静かなところに行こうか。そのワンピースも脱いで、身体を楽にした方が良い」

ファヨンは半ば意識が朦朧としたまま頷き、立ち上がろうとした。だが、ふらふらと平衡感覚がなくなってしまったようで、足許が覚束無い。

その時、断固とした声が割って入った。

「豪史（たけし）さん、そこまでですよ。この子は俺の彼女なんだから、手出しはしないで下さいね？」

ジュンスがファヨンの傍らに立っていた。いつのまに來たのだろう、ファヨンはぼんやりと彼を見上げた。ジュンスは何故か怒っているような表情で、彼女を見ようとしなない。

「なにに、この可愛い子、ジュンスの女？」

バーテンダーが大仰に愕いたジェスチャーをして見せた。

「豪史さん、弱いカクテルだって嘘言っ、強いお酒を女の子に飲ませてますよね。その後、酔った女の子をホテルに連れ込むんだ。その手管でもう何人の子を泣かせたんですか？ 今にそんなことやってたら、下手すりゃ犯罪ものですよ」

誰かを泣かせたら、その報いは必ず自分に返ってくるんです。

最後の科白はやや凄みをきかせた声で言い、ジュンスは豪史という男を睨んだ。一瞬、優しい顔立ちのジュンスに圧倒的な存在感が漂い、抜き身の刃のような剣呑なオーラを放つ。

豪史は気圧されたように蒼褪めた。

「判った、判ったよ。ジュンスの女には今後、一切手を出さないから。そんな怖い顔するなよ。普段怒らないヤツを怒らせたなら、怖えな」

彼は鼻白んだ様子で言い、顎をしゃくった。

「さっさと連れて帰れよ。そんなぐでんぐてんに酔っばらって店にいられちゃ迷惑だ。それに、そんなに大切な女なら、こんな店に連れてくんな」

ジュンスがきついまなざしを豪史にくれた。

「誰がこんなになるまで酔わせたんだ！」

豪史は鼻を鳴らし、そっぽを向いた。その時、ドアが開いて、また新しい客が入ってきた。若い女の子二人連れなのを見て、豪史はまた別人のような愛想の良い声で対応している。

「いらっしゃい。君たち、可愛いねー」

ジュンスは呆れたように首を振り、ファヨンの背中をそっと押した。

と、來たばかりの女の子二人組がジュンスを見て歓声を上げた。

「あ、韓流イケメン喫茶のジュンス君だ！」

「本物だよ～、夜はここにいるってラインの書き込みを読んだことがあるけど、本当だったんだねー」

やたらと語尾を伸ばした舌っ足らずな話し方が癪に障る。

「ジュンス君、一緒に写メ撮って」

「サインしてえー」

口々に言い寄ってくるのに、ジュンスは笑顔でしれっと応えた。

「ごめん、俺、日本語がよく判らなくて」

後ろで豪史がまた鼻を鳴らした。

「嘘つきはどっちだ」

イケメンコンテストで入賞した彼は顔写真も結構ネットで出回っている。そんな彼を目当てに彼がバイトする店々を訪ねてくる女性ファンはとにかく多い。いちいち相手をしてはキリがないので、面倒を避けるためにジュンスは日本語が判らない振りをすることもあった。

「何だー」

「残念」

いかにも不満そうな女性二人を後に、ジュンスはファヨンの耳許で囁いた。

「とにかくここを出よう」

ファヨンの肩を抱くようにして、店の外に出た。

ドアが閉まり、二人はエレベーターで階下まで降りた。

店の前は路地で、そこを抜けると駅前通りに出る。ファヨンは一歩踏み出そうとして、目が回って、よろけた。

石畳の狭い道に、月光が濡れたような光を注いでいた。紫紺の夜空に幻想的な半月が危うげに掛かっている。まるでオーラクオーツのように神秘的な光を放っていた。

この暗さではビルの前に無造作に積み重ねてある店のゴミや廃棄物もよく見えず、月の光に淡く照らされた石畳の道はどこか中世のヨーロッパ辺りの街角の風景を彷彿とさせた。

「危ないッ」

彼が咄嗟に抱き止めてくれなければ、ファヨンはそのまま石畳に激突していたに違いない。

「離して」

ファヨンはジュンスの手を払いのけ、礼も言わずにそのまま行こうとした。

「待てよ」

ジュンスがすかさずファヨンの右手を掴む。

「なに？」

ファヨンは彼をキッと見た。ジュンスは小さく息を吐き、ファヨンの手を放した。

「何で、こんなに酔っぱらうまで飲んだんだ？」

彼の方もファヨンに負けなくらいに怒っているようだ。

「知らない」

パイとそっぽを向くと、ジュンスがファヨンの両頬に手を添えて、無理に自分の方に向かせた

。

「良いか、もっと自分を大切にしろ。そんな男を悩殺するようなワンピースで夜に外出なんかするんじゃない、易々と男の下心も見抜けず誘いに乗るんじゃない」

言い聞かせるように言う彼に、ファヨンは鼻で嗤った。

「何がおかしい？」

「私はあなたの彼女でも何でもないわ。束縛するのは止めて」

「それなら、君はあのまま俺が止めない方が良かったのか？ あの男は気に入った女の子が来れば、強い酒を飲ませて、しこたま酔わせてホテルに連れ込む常習犯なんだぞ。ホテルに着いて二人きりになって、泣いて帰らせてくれって頼んで帰らせて貰えとでも？」

「ちゃんと断るもの」

「嘘言え、君はあいつと一緒に出ていこうとしてただろ、俺が止めなきゃ、今頃はもう君はホテルであいつに抱かれてたさ」

「一もう、良い」

ファヨンは彼を無視して大通りに向かおうとした。

「自分を大切にしろというのは、何も君が明姫だからじゃない。一人の女性としてもっと自分を大切にしろんだ、ファヨン」

ファヨンは振り向いた。

「あなたはまだ、そんなことを言ってるの？ 私は明姫じゃないって何度言ったら判るの」

ふいにジュンスが何かを呟き出した。

「何故、あなたは今、ここにはいないのか。私の心はあなたを求めてさまよい、私の瞳はあなたを想い、こんなにも哀しみの涙を流しているのに、この張り裂けそうな哀しみと淋しさを癒してくれるあなたはいない」

彼のまなざしが一瞬、揺れた。

「妻よ、愛する妻よ、私の心はたとえどれだけ気が遠くような時代を経ても、何度でも生まれ変わって、あなたを求め続け、そして、あなたを探すだろう」

あまりにも深い哀しみが込められた詩だ。その言葉一つ一つに込められた最愛の妻を失った男の悲哀が胸に迫ってくるようだ。

ファヨンはつい訊かずにはいられなかった。

「その詩は一」

ジュンスが哀しげに微笑んだ。

「直宗王が和嬪の死後、詠んだとされる詩だよ。題名は『一片丹心（イルピョンドンシム）』。亡くなった妃をずっと恋い慕い続けた孤独な王の心がよく表されているタイトルだといわれている。いつの頃、詠まれたのか年代は定かではないらしいが」

その後でフツと笑う。何という儂い微笑みだろう。ファヨンは胸をつかれた。

「でも、俺はちゃんと知ってるよ。孤独な老いた王は亡くなる二年前に宮殿の庭で月を見上げながら、この詩を作ったんだ」

ファヨンは彼の言葉に、ハッとした。奇しくも『丹心』というのはファヨンの両親が経営する店の名前と同じだ。

ジュンスが懐から小さな箱を取り出した。深紅のビロード張りの小箱を開き、何かを取り出す。その取り出したものを大きな手のひらに乗せ、ファヨンに見せた。

「これが何か判るかい？」

蝶を象った指輪は羽根の部分にキラキラと光る石がはめ込まれている。

「これは指輪でしょう」

煌めく石は夜明けの空のような、露草の花の色を閉じ込めた美しい青紫色だ。

「この紫の石が何か知ってる？」

「一」

ファヨンは首を振った。

刹那、彼女の唇からまた無意識に言葉が洩れた。

「一タンザナイト」

「そう、タンザナイトだ。三百年前、俺が君に贈った約束の石」

「約束の石？」

「そう、三百年前のあの時、君には言わなかったが、俺は君との出逢いに運命のようなものを感じていた。探し求めていた女とやってめぐり逢えたと思ったんだ。これを贈って歓ぶ君の笑顔を見ながら、この女を生涯かけて守っていければ良いと思った、この笑顔をずっと側に居て見たいと思ったんだ」

彼の声が次第に遠くなり、瞼にまた一つの光景が立ち現れる。

そう、あれは確か、あの男と二度目に漢陽の下町で出逢ったときのことだ。彼と二人で漢陽の町を歩いた。

私は思い出せる。あの露店が立ち並んだ下町の姿や、物を作り売る人々の活気溢れる呼び声。野菜を売る女の生きの良い声が響き渡り、店を隣り合わせた小間物売りたちの諍いの声に、逃げ出した売り物の鶏のかしましい啼き声が混じる。

私の大好きな揚げパンを揚げる匂いもどこかの露店から流れてきて一。そこで、また別の光景が浮かぶ。

彼と一緒に美味しそうに揚げパンを頬張る自分の姿が見えた。だが、と、首を振る。今の、思い出そうとしているのは、彼と揚げパンを食べたときじゃない。

再び、最初の映像がまた浮かんだ。そう、彼と二度目に漢陽の下町で出逢った時。彼一ユンが私に露店でタンザナイトのノリゲと簪を買ってくれた。あれは後々ずっと、私の宝物になったのだ。

あの時、私は一旦は彼にそんなものを買って貰うことはできないと断った。だが、ユンは私にこう言ったのだ。

一それに、そなたと私は見ず知らずの間柄ではないだろう？

一え？

眼を見開いた私にユンは愉快そうに言った。

一宮殿の庭で一度、今日はこれで二度目になる。最早、見ず知らずとは言えまい。

少し話を強引に持って行きすぎだが、確かにユンと出逢うのはこれが初めてではなかった。

私は手にした簪とノリゲを見つめた。小さな花を象った銀細工の簪は、花の部分が透明な青紫色の玉でできている。小さな花は可憐で、桜草に形が似ている。

ノリゲはまるでお揃いで拵えたように、小さな花が何個か集まっていて、その下に白と淡い蒼をグラデーションに染めた長い房がついている。花の部分は店の主人たちが言っていた灰簾石（タンザナイト）という玉なのだろう。

ユンは隣り合わせた二つの小間物屋から、それぞれ簪とノリゲを買った。二つの店の主たちを仲違いさせないためだった。

一素敵。

思わず呟いた本音に、ユンは屈託ない笑みを浮かべて飲んだ。

一そうか？ 気に入ってくれたか？

一この花の色と形をひとめ見て、そなたにぴったりだと思ったのだ。まるでこの国の夜明けの空を思わせるような、清々しい明けの色が潔くて凜とした、そなたの印象にぴったりだと。

微笑む彼と眼と眼がぶつかり、私はあの時、慌てて視線を逸らしたのだ。何故か、初めて出逢ったときから、彼に見つめられると、落ち着かなくなる。

ファヨンは唇を戦慄させた。もう、あの不愉快な耳鳴りも頭痛もしなかった。

ファヨンは今でも一三百年経た今でさえ、も思い出すことができる。ユンが彼女(明姫)に贈ったタンザナイトの簪とノリゲがどんな形をしていたか、どれほど美しい色をしていたかを。

ファヨンが見上げた先にはジュンスがいた。私は今でも彼に恋をしている。気の遠くなるような長い時代を経ても、あの最初に出逢った日のように、彼に見つめられると、落ち着かなくなる。

「この指輪を貰ってくれる？ 実は本気で三百年前とそっくりそのままの形をしたノリゲと簪を特注で作って貰おうかとも考えたんだが、今は簪もノリゲも民族衣装を着たときくらいしか身につけない。それなら、いっそのこと指輪の方がいつも身につけていて貰えると思ってね」

それからと、彼はズボンのポケットから細長い箱も取り出した。ほらと、まるでマジシャンのようにお揃いのピロードの箱から今度はネックレスを出す。

「綺麗」

今度はリングと対になった同じく蝶のネックレスだ。やはり同様に羽根の部分には煌めくタンザナイトがはめ込まれている。

「俺はずっと君が最後の約束で言ってくれたように、俺を捜し出してくれるのを待っていた。待って待って待ち続けて、三百年の間に何度も生まれ変わりながら、俺も君を捜した。たとえ何度生まれ変わっても、俺には君しかいない。これを受け取ってくれるね？」

直截な彼の言葉が嬉しいはずだ。生まれ変わり云々はともかく、自分はジュンスを好きなのだから。

けれど、ファヨンはまだ自信がなかった。徐々に三百年前の記憶の断片らしきものは思い出してはきてはいるけれど、それだけで自分が国王の妃だったなんて信じても良いのだろうか。大体、西暦二千年の時代に、三百年前の記憶を持った人間が存在するということが自体がかなり怪しい話なのだ。

ファヨンはゆるゆると首を振った。

「ごめんなさい。私は指輪もネックレスも貰うことはできないわ。どうしても、三百年前の記憶だとか、転生だとかは信じられない話なの。あなただけならともかく、それが私まで及ぶとしたら、尚更安易には信じられない」

「君はまだ、そんなことを言っているのか！」

ジュンスが烈しい眼でファヨンを見た。

「俺はずっと君を待ち続けてきた。幼い頃、俺を見た占い師は言った。君と出逢えない限り、俺は永遠に輪廻の輪から抜け出すことができないだろうと。焦がれた女を捜し求めるまで、哀れな三百年前の王の魂は永遠に転生を続けるしかないんだよ」

「そんなの、私は知らない」

ファヨンは夢中で首を振り続けた。

「それは、あなたの言い分や都合でしょう」

ジュンスが近づいてきた。ファヨンの細腕を掴み、グイと力任せに引き寄せる。

「真実から眼を背けるな、たとえ逃れようとしても、宿命からは逃れられない。俺たちは三百年

前にも出逢い、今こうして現代でも出逢った」

「知らない！」

ファヨンが叫んだ途端、唇が熱いもので塞がれた。

「一止めー」

軽く触れ合わせるだけかと思ったら、すぐにまた塞がれる。角度を変えたキスは延々と続き、ファヨンは息苦しさに酸欠の金魚みたいに口を開けて喘いだ。

「苦しい、止めて」

必死にジュンスの身体を押し返そうとするけれど、大人の男の力で抵抗はあっさりと封じ込められた。

しかも口を開いた刹那、ぬめりとした彼の舌が入り込んできて、逃げ惑う舌を絡め取り烈しく吸い上げてくる。生まれて初めての口づけなのに、あまりに強引で乱暴で嫌らしすぎた。

「俺は三百年もの間、待ち続けたんだ。もう待てない」

彼の手がそろりと伸び、ファヨンの胸のふくらみを包み込む。黒いニットのワンピース越しにやわらかく何度か揉まれ、つんと立った先端を指で押された。

「いやっ」

ファヨンは渾身の力でジュンスを突き飛ばした。

「あなたは最初から私に自分の気持ちを押しつけてばかりだわ。あなたが一度でも、私の心を考えてくれたことがあったというの？

過去世だとか輪廻転生だとか、たとえそれが真実であったとしても、私は三百年前のことを何一つ憶えていないのよ。なのに、いきなり現れて運命なんだから、受け容れろなんて言われて、受け容れられるはずがない。今は、あなたが生きていた三百年前とは違うの。韓国にも王さまはいないし、今のあなたは国王じゃない。私に命令したり、強引に気持ちを押しつけることはできないのよ」

ジュンスが力なく言った。

「強引にキスしたことは謝る。けど、そうなのか？ 本当にファヨンはそう思っているのか？俺だけが一方的に君に気持ちを押しつけていると。教えてくれ、君はもう俺のことを何とも思っていないのか？」

名前は言わなかったけれど、最後の問いかけは、恐らく`直宗、が`明姫、に発した問いだったのだろう。

ファヨンは黙り込んだ。`ファヨン、は`ジュンス、を間違いなく好きだ。だけど、自分が`明姫、として`直宗、を好きなのかと問われても、明姫としての記憶をいまだ取り戻し切れていないファヨンは応えるすべを持たない。

ジュンスが何かに耐えるような表情で拳を握りしめた。その拳が小刻みに震えている。

「ごめん、確かに君の言うとおりで。俺は君に自分の気持ちだけを押しつけすぎた。俺は今でも君が好きだ。何度転生しても、君以外の女性は考えられない。だが、転生してきた君が俺を必ずしも選んでくれるわけではないとは正直、考えたこともなかった。俺は君を捜し出して苦しめようと思ったわけじゃない。生まれ変わった君の側にいるべき男が俺じゃないというのなら、身を退くくらいの分別はまだ残ってる」

そこで言葉を句切り、彼はファヨンを切なげな眼で見つめた。

「長くして苦しい三百年だったが、待った甲斐はあったよ。こうして今の時代に君と再び出逢えて、また君に恋をした。元気な君の笑顔をこうして見られただけで、俺は幸せだ。これからも自分が転生を続けなければならないのかは判らないけれど、もう、そんなことはどうでも良い。三百年前の時代で、君は二十一歳の若さで毒殺されて死んだ。今度は今の世で幸せになって、長生きしてくれ。俺じゃない男でも良いから、幸福な結婚をして欲しい。今度はちゃんと元気な子どもが生まれるだろうから」

今度はちゃんと元気な子どもが生まれるだろうから。その言葉の意味を訊ねる暇も与えず、彼は微笑むと背を向けた。

最後の科白は紛れもなく`ユン、が`明姫、に語った言葉だった。三百年、ずっと明姫を捜し

続けてきたユンの魂がどうしても明姫に伝えなかった科白だったのだ。

ファヨンは茫然として、次第に遠ざかってゆくジュンスの広い背中を見つめるしかなかった。

何度でも、あなたに恋をする

何度でも、あなたに恋をする

一く、苦しい。

ファヨンは薄い胸を大きく喘がせた。ゼエゼエと鳴る呼吸は苦しげで、今にも途絶えてしまいそうだ。

私、死ぬのかしら。

次第に薄れてゆく意識の中で考える。

ファヨンは夢を見ていた。不思議なことに、ファヨン自身にはそれが夢だと判っているのに、リアルな感覚がある。あたかも夢が紛れもない現実であるかのように、五感が自分の周囲のものすべてに対して働いていた。

夢の中で、ファヨンは苦悶に喘いでいた。

そういえば、と、ファヨンはゆっくりと思い出す。

私は薬湯を飲んだのだった。いつも側に居て、姉のようにまめやかに仕えてくれる洪尚宮ごとハンダンから湯飲みを受け取り、たった今、薬湯を飲んだばかりだ。

更に苦しい息の下、彼女は記憶の糸を手繰り寄せる。その薬湯を運んできたのは、見たこともない若い女官で一。

私の出産で殿舎も忙しいから、別の殿舎から応援の女官が寄越されたとしても、おかしくはない。だから、見かけない顔の女官だったとしても、怪しいとは思わなかった。

けれど、もう少し慎重になるべきだったかもしれない。仮に、あの見かけない女官が運んできた薬湯に毒が紛れ込んでいたとしたら？

そこで、ファヨンは小さく呻き、また血を吐いた。一面に散る血飛沫は毒々しいほど鮮やかに見える。傍らでハンダンが泣きながら叫んでいるのが聞こえた。

一和嬪さま、和嬪さまっ。

大好きなハンダンの顔がぼやけている。もう、眼もちゃんと見えていないのだろうか。

一何ということでしょう、早うに医師を、医師を呼ぶのだ！

ハンダンがまた狂ったように叫んだ。ハンダンの腕に抱えられ、私はぐったりと横たわったままだ。身体がだるくて、重くて、身じろぎもできない。

一和嬪さま、和嬪さま。いけません、眼を閉じないで。あなたさまにはまだ、大きなお仕事が残っているのですよ。この国のためにも、国王殿下のためにも、お腹の大切な御子が無事にこの世に送り出すという大任をお持ちなのですから、どうか、お気を確かにお持ちになって。

私はハンダンの顔を力なく見上げた。ハンダンは号泣している。そんなに泣かないで。何だか、私がもう死んでしまったようじゃない。

私、死ぬのかしら。改めて`死、というものに対する恐怖が私の中でふつつつと込み上げた。

嫌だ、まだ死にたくない。私はまだ殿下のお側にいたいのに、私に残された時間はもうあとわ

ずかだというの？ 私の生命の焰は最早、燃え尽きるというの一。

それに、何故、ヒヤンダンが私を和嬪と呼ぶのかしら。私の名前はファヨンのはずなのに。

ほんの少しの小さな違和感が生まれる。だが、私の意識は、ほどなく聞こえてきた愛しい声音で現に引き戻された。

一直に典医が来る。気を確かに持つのだ。

今、ヒヤンダンの代わりに私をしっかりと抱いてくれているのは誰？

眼をうっすらと開くと、私の最愛の男が気遣わしげに覗き込んでいるのがぼんやりと見えた。

この顔はどこかで見たような気がする。ジュンスに似ている。でも、この男性は韓流時代劇に出てくる王さまのような立派な衣を着ているし、よく見ればジュンスではない。

でも、私はこの方を愛しているの。この世で自分の生命と引き替えにしても惜しくはないほど、この方を大切にお思い申し上げているの。

国王殿下、私がこの世で最もお慕っている方。ごめんなさい、ユン。私はいつもあなたを苦しめてばかりね。あなたが私を愛してくれたせいで、実の母君の大妃さまとの仲は余計に険悪になってしまったし、一人の女に溺れる好色な王だなんて悪く言われることだってあるもの。

私はいつも、あなたに申し訳ないと思っていた。でも、私はあなたに出逢わなかった人生なんて、考えられない。きっとこのまま生命尽きたとしても、何度でも生まれ変わって、あなたを探すわ。そして、素敵なあなたに恋をするの。

一殿下、私の生命は既に尽きようとしております。

弱々しい声を私は振り絞った。みっともなく、声が震えている。

—いいや、そなたは死なぬ、私が死なせるものか。

ユンの私を抱きしめる腕に力がこもった。まるで、私の生命がこの身体からさ迷いだしていくのを引き止めるかのように、彼が私をギュッと抱きしめる、。

これだけは殿下にお伝えしておかなければ。私は最後の力を振り絞った。

—数ならぬ身が殿下にお逢いし、こうしてお側近くお仕えすることができ、またとない幸せな生涯でございました。

自分をたった一人の女だと言い、生涯愛し抜くと言ってくれたユン。そんな男に出逢えた。女として、最高の幸せだ。

ただ、自分の不注意でこの世の光を見ることなく逝ってしまう胎内の我が子には申し訳ないと思う。自分がもう少し気を付けていれば、大妃の怖ろしさを理解していれば、どこの者とも知れぬ不審な女官の運んできた薬湯などけて口にはしなかつたらう。

明らかに自分は甘すぎた。他人を信じることは美点であると同時に、敵に隙を見せるという愚かさともなる。自分はしてはならない過ちを犯してしまったのだ。

私の眼裏に朧長けた美しい女人の貌が浮かぶ。この朝鮮で最も高貴な女性、愛しい男の母である大妃さま。恐らく私は大妃さまに殺されるのだろう。あの方はいつも私を憎しみに満ちた眼でご覧になっていた。

—私はもう、そなたと金輪際逢うつもりはない。そなたとこうして話をするのも最後になろうからの。

早すぎる陣痛が起こる直前、宮殿の庭園で大妃さまとお話をした時、確かに大妃さまはそう仰った。あの科白の裏には深い意味が隠されていたのだ。

現に、私はこうして逝こうとしている。

ファヨンは眼をまたたかせた。見えない、ユンの貌が見えない。絶望が波となって押し寄せ、混乱の気持ちが眼尻に涙となって滲む。

逝きたくない。その必死の想いで、ファヨンは細い手を差しのべた。すかさず力強い手がその手を握りしめてくれる。

大好きなユンの手、この手の温もりを私はけして忘れないだろう。彼が幾ら握りしめていてくれても、私の身体は小刻みに震えていた。死ぬのが怖いからではない。きっと飲まされた毒のせいだろう。

私の手にポトリと温かな滴が落ちた。ユンが泣いている—？

駄目な私、最後の最後まで、大好きなあなたを泣かせてしまうなんて。

せめて、これだけはあなたに伝えたい。私は最後の力を振り絞ったけれど、それは囁きほどのか細い声にしかならなかった。

—私の魂はずっとお側にいます、だから、泣かないで。

私は何度生まれ変わっても、この広い世の中から、あなたを探し出し、恋をするだろう。たった一人の愛しいあなたにめぐり逢う度に、私は何回でもあなたに恋をするに違いない。

ユンが何度も頷いているのが、たとえ見えなくても私には判った。

ああ、生命の焔が今、本当に尽きようとしている。

一殿下、私はお先にウンの許に参ります。どうか民から讃えられる聖君におなり下さいますよう
。

それが私からあなたへ伝える最後の言葉だ。

一行くな、行くなーっ。

ユンが絶叫した。私の意識はそこで完全に途切れた。

「一っ！」

ファヨンはハッと眼を見開いた。ガバとベッドの上に上半身を起こす。五月初めの深夜はまださほど暑くもないはずなのに、全身に汗をかいていた。

「夢だったの？」

夢と片付けてしまうには、あまりにもリアルすぎる夢。けれど、彼女にはもう判っていた。

あれは夢などではない。ジュンスが言ったように、彼と出逢ってからファヨンがしばしば見た幻視は夢まぼろしなどではなかった。遠い昔、確かにファヨン自身が一正しくいうなら、ファヨンの前世の姿である明姫が体験した記憶なのだ。

刹那、すべての記憶が洪水となって一挙に溢れ出した。せき止められていた過去の思い出が押し寄せてくる。

ファヨンはすべての記憶を思い出した。今、ユンと生きた六年間のすべての日々の記憶が彼女の心に甦った。それはさながら、バラバラになっていた無数のパズルのピースが漸くあるべき場所におさまり、一つの絵が完成されたのにも似ていた。

そう、和嬪蘇氏の二十一年間の生涯が今、その生まれ変わりであるファヨンにもはっきりと思い出せた。

ユンの母方の伯父である領議政に両親や幼い弟を無残に殺され、自らも度々生命を狙われた。刺客から逃れるため、母方の伯母崔尚宮を頼って後宮に見習い女官として入ったこと。

やがて成長して、正式な女官となり、ユンとの桜草の出逢いから、やがて正体を隠したユンが国王だと知って、一旦は身を退いた。やがて迎えにきたユンと共に後宮に戻り、国王の寵愛第一の妃として時めいた日々、正妻である王妃毒殺未遂の疑いをかけられ、廃妃となり、庶人となった。

ユンと離れて孤独に耐えた観玉寺での日々、やがてユンの御子を身籠もり晴れて後宮への帰還を果たした。側室としては最高位の嬪となり、世子の生母として、およそこの世で考えられる女の栄華はすべて手にしながら、明姫の晩年は淋しいものだった。

世子となった愛しい我が子は夭折し、引き続いて年子で第二子を授かりつつも、出産の途中で明姫は亡くなった。

いや、あれはお産で亡くなったのではない。

私は毒殺されたのだ。

血を吐いて倒れたのは、見知らぬ若い女官が薬湯を運んできて、それを飲んでからだ。恐らく、私を憎む誰か、大妃さまが私を殺したのだろう。

けれど、三百年経った今になって、それがどうしたというのだろう。私を殺した大妃さまもはるか昔に亡くなり、私は歴史の中では難産で死んだことになっている。今更、和嬪は大妃に毒殺されたのだと私が叫んだところで、誰も耳も貸さない。

その時、ファヨンはハッとした。室内はナイトテーブルのスタンドの落とした灯りだけだ。その薄い闇に満たされた中で、枕許に置いた携帯が紅く点滅している。メールの着信があったらしい。

ファヨンはメタリックレッドの二つ折り携帯を開いた。画面に「新着メール」の表示が出て

いる。クリックすると、メールが二通着ている。一通目はダイレクトメールだったので、すぐに削除した。二通目はジュンスからだった。

—先日の写真を送るよ。

P. S. 申し訳ないが、桂木さんから君のメルアドと電話番号を聞いたよ。渋る彼女から無理に訊き出したのは俺だから、彼女と喧嘩したりしないでくれ。

短い文面とともに、一枚の画像が添付されていた。画像を表示させ、ファヨンは小さく息を呑んだ。

それは上杉写真館でジュンスとチマチョゴリを着て撮影したものだ。あのときは何故、彼があんなことをするのかと訝しく思ったけれど、今なら彼の意図が判る。

彼は明姫の生まれ変わりであるファヨンに明姫としての記憶を取り戻させようとしていたのだ。かつて自分たちは三百年前の朝鮮王朝時代に生きていた。当時、当然のように纏っていた衣装に二人で身を包めば、眠っている明姫の魂を目覚めさせるきっかけとなり得ると考えたのかもしれない。

ファヨンはベッドから降りると、部屋の片隅の小さな冷蔵庫を開けた。よく冷えたミネラルウォーターを取り出し、ペットボトルからグラスに注ぎ一気のみする。冷えた感触が咽元をすべり落ちてゆくのが気持ち良かった。

ファヨンは再びベッドの上に飛び乗るように座り、両脚を引き寄せて足首を抱え込んだ。小さなスタンドの灯りしかない室内で、ファヨンの肩を覆う黒っぽい髪が背後の窓から差す月の淡い光に照らされて、光沢を帯びている。

彼女はもう一度、携帯の画面を覗き込んだ。小さな枠の中で、朝鮮王朝時代のように盛装したジュンスとファヨンが寄り添い合い、微笑んでいた。その今の二人の姿に、ファヨンは確かに三百年前の自分たちを見た。

突如として無意識の中に、彼女の口から呟きが零れ落ちた。

何故、あなたは今、ここにはいないのか

私の心はあなたを求めてさまよい

私の瞳はあなたを想い　こんなにも哀しみの涙を流しているのに

この張り裂けそうな哀しみと淋しさを癒してくれるあなたはいない

妻よ、愛する妻よ

私の心は

気が遠くなるような時代を経ても、何度でも生まれ変わって

あなたを求め続け、そして、あなたを探し出すだろう

明姫が死んだ後、直宗が詠んだとされる詩である。明姫の死後に作られたものなのに、何故、ファヨンが憶えているのか。

互いを想い、ひたすら求め続ける心は時として奇蹟さえ起こすのか。二十一世紀の科学者であれば信じようとはしないであろう奇蹟さえも。

けれど、ファヨンはもうジュンスに嫌われてしまった。

一俺じゃない男でも良いから、幸福な結婚をして欲しい。

悄然として去っていった彼をファヨンは追いかけすらしなかった。

両手で顔を覆う。取り返しのつかないことをしてしまった。大切な男を失ってしまった。

何て馬鹿な私。やっと明姫として生きた記憶を取り戻したというのに、肝心のあの男、ユンはもう手の届かないところに行ってしまった。

溜息をついた瞬間、思い出したように携帯が鳴った。しじまに鋭く響いた音にピクリと身を震わせ、ファヨンは深呼吸した。

かすかな不安と期待感がない交ぜになった気持ちを追い払うかのように勢いよく首を振る。覚

悟を決めたように眼を閉じ、見開いてから電話に出た。

「もしもし」

「今、君の家の前にいる。」

ハッとして立ち上がり、慌てて窓際に駆け寄った。淡いピンクのカーテンを開けると、間違いなくマンションの前の狭い道路脇に人影が見えた。ファヨンの視線を感じたかのように、塀越しに彼が立ってこちらを見上げていた。

堪らず最上階の二階から階段を駆け下り、外に飛び出した。マンションといってもアパートを多少マシにした程度の代物である。似たような造りの部屋が幾つか並んでいる構造で、二階までしかないのだ。

高級マンションのようにエントランスホールのような洒落たものがあるわけでもないから、部屋を出て階段を降りれば、すぐに前に出られる。周囲はフェンスで囲まれているので、フェンスについた鉄製の門を開け、ファヨンは道路に飛び出した。

ジュンスはフェンスに長身を凭せかけるようにして立っていた。

パジャマに着替えずに着の身着のまま眠り込んでしまったのはかえって幸이었다。

飛び込んできた彼女を、彼は戸惑いながらも両腕をひろげて受け止めた。

「思い出したの」

ファヨンは背伸びするようにして彼を見上げた。昔もそうだった、背の高い彼と話をするには、小柄な彼女は少し伸び上がるようにしていた。そして、そんな彼女を彼はいつも少し眼を細めて眩しいものでも見るかのように見つめ返していた。

今も彼はあの日のように、ファヨンを少し眼を細めて見つめている。

「夢を見たの」

「一夢？」

ジュンスが眼を瞠った。ファヨンは今夜、見た不思議な夢の話をかいつまんで彼に話した。

最後の別れのシーン、直宗と明姫の哀しい別離の様子を思い出しながら彼に語った。彼も彼女が`明姫、として目覚め、その記憶を語っているのだと即座に理解したようである。

あの三百年前の哀しい別離の記憶を思い出すのは、二人にとっては辛いことだった。だが、未来を見つめるためには、乗り越えなければならない過去や因縁があることも、二人は正しく理解していた。

ファヨンの黒い瞳に冴え冴えとした涙の雫が宿った。

「私は何度生まれ変わっても、あなたに恋をするわ、ユン」

「私は何度生まれ変わっても、この広い世の中から、あなたを探し出し、恋をするだろう。たった一人の愛しいあなたにめぐり逢う度に、私は何回でもあなたに恋をするに違いない。」

今のきわにユンに囁いた明姫の遺言が今、明姫が転生したファヨンの口から発せられた。

「お逢いしとうございました、殿下」

今なら、ファヨン(明姫)は知っている。最愛の妃を失った後、ジュンス(ユン)がとれだけ孤独な日々を過ごしたか。民から慕われる聖君となってと囁いた明姫の最後の願いに応えるべく、彼が王としての茨の道を歩み続け、やがて三百年後の今の世にまで語り継がれるほどの聖君となったのも。

「ご立派に王としての務めを果たされたのですね」

「そなたがいなければ、やはり、私は駄目だ。これからはずっと私の側にいて、私を支えてくれ」

これは`直宗、と`明姫、としての会話だ。ジュンスの整った面がやわらかに笑んだ。

「本当に久しぶりだね、明姫」

彼の手によって指輪がファヨンの指に詰められる。今、長い時を経て、王と寵姫の悲恋を象徴したタンザナイトが三百年ぶりに妃の元に戻った。

「これが俺たちの新しい約束の印だ」

ファヨンもまた願いを込めて、蝶の形をした美しい指輪を見つめた。
一ずっと大好きな男と一緒にいられますように。今度こそ、二人で長い人生を歩いてゆけますように。

彼女の願いは今度こそ、天に聞き届けられるに違いなかった。

ごく自然に二人が近づき、唇が重なる。小鳥が啄むように軽いキスから次第に口づけは深く烈しいものになっていった。

まるで三百年の空白を埋めるかのように。

彼の彼女を求め続けた恋情を表すかのように。

舌を絡め合う濃厚な口づけは、かつてユンと明姫として夜毎、後宮の寝所で烈しく身体を重ねた日々を思い起こさせる。

一生涯かけて、そなただけを愛し抜くよ。

飢えた獣たちのように互いを貪り求め合った濃密な夜、彼に熱く囁かれた科白が一瞬蘇り、ファヨンの身体が熱くなる。

漸く口づけを解いた彼が薄く笑った。人差し指でファヨンの唇を拭う。長く狂おしいキスでファヨンのふっくらとした薄紅色の唇は熟れたように腫れ、唾液がしたたり落ちていた。

「凄く色っぽいっていうか、嫌らしいっていうか。今のファヨンはそんな感じ」

濡れた吐息混じりの声が耳朶をくすぐり、官能の漣がファヨンの身体中を駆け抜けてゆく。まだ性体験のないファヨンにはあまり馴染みのない感覚だ。

「三百年も待たされたんだ。俺、早くファヨンを抱きたい」

魅惑的な艶っぽい声で囁かれ、ファヨンはカーッと身体中の血が頬に集まるのを感じた。

「なっ、何てことを。あなたが真っ先に考えるのは、それしかないの！」

ファヨンは真っ赤になり、拳を振り上げた。

「この助平男」

「相変わらず威勢が良いな。じゃじゃ馬なところも変わらないようだ」

ジュンスが笑いながら、ひょいと身軽に飛んできた拳をよけた。

「俺たちは何度も夜を共にした仲なんだぞ、そなたも憶えているだろう、明姫」

熱い声で耳打ちされ、ファヨンの顔は更に熟した果実のようになった。皮肉なことに、ファヨンとしては未経験でも、明姫としての魂はユンと過ごした濃密な夜のことをしっかりと記憶しているのだ。

居たたまれない心地のファヨンをジュンスは笑いながら眺めている。

一ユンって、こんなに性格が悪かったかしら。

いやいや、昔から、何かあると明姫をからかったり、閨でもわざと恥ずかしい科白を囁いては彼女が羞恥に悶えるのを愉しげに眺めていたものだ。

ある夜、後宮の寝所で烈しく貪るように求め合った自分たちの姿が突然、映像として浮かぶ。

あれは第一子のウンを失い、第二子を妊娠中のことだった。もう大きなお腹をしていた明姫をユンは何度も情熱的に求めてきたのだ。

一愛している。

ユンが極まった刹那、明姫もともに絶頂を迎えた。

彼の囁きに彼女もすかさず応えた。

一私も心から愛しているわ、ユン。

素肌を晒して抱き合い、奥深い部分で繋がりが合ってるこの瞬間だけは国王と側室ではなく、た

だの男と女に戻れる。

だからこそ、私たちはあの頃、時を惜しむかのように夜中、身体を重ねた。もしかしたら、私も彼も哀しい別離の瞬間が刻一刻と迫りつつあることを、どこかで察知していたのだろうか。—こんなに好きになるだなんて、あなたに出逢ったときは想像もしなかった。私があなただを大好きなことを、あなたは知っている？ きっと、あなたが考えている以上に、私はあなたを愛しているわ、ユン。私だけのあなた。

私は彼に抱かれて頂点に達しながら、愛しい男の腕の中でこの上なく幸福だった。

私は誰よりも深く彼を愛した。恐らく彼が私を愛してくれた以上に。

三百年前の切ない恋情が押し寄せ、ファヨンは湧き上がった涙に瞳を潤ませた。

と、ジュンスがふと笑いを収め、真顔になった。

「俺たちは過去を乗り越えて、今、ここにいる。もう辛い記憶は忘れて、今、これからの時間を二人で生きていこう。三百年前の直宗と明姫ではなく、ジュンスとファヨンとして」

ファヨンは頷きながらも、彼を見上げて付け加えることを忘れない。

「それでも、私はこれから先、何度生まれ変わっても、あなたに恋をしようわ、ジュンス」

ジュンスの手が宝物のように愛おしげな手つきでファヨンの髪を撫でた。

「ところで、あの女(ひと)は、どういう関係？」

「あの女って？」

見上げるファヨンをジュンスが小首を傾げて見つめ返してきた。

「バーで一緒に演奏していた女。凄く美人で色っぽかった」

「バンド仲間さ」

ファヨンの不安を知って知らずか、彼は事もなげに言う。ややあって、ジュンスの整った顔に意地悪な笑みが浮かんだ。

「何だ、妬いてるのか？」

どこまでも嬉しげなジュンスが恨めしく、ファヨンは頬を膨らませて、そっぽを向いた。

「知らない！」

「三百年経って君に妬いて貰えるのは格別に気分が良いよ」

ファヨンはますますむくれる。

ジュンスの陽気な笑い声が少しひんやりした五月の夜陰に弾けた。

これが本当のエピローグ

これが本当のエピローグ

ジュンスは病院の廊下で一人、座っていた。両手で頭を抱え込み、うなだれている彼の姿は到底、見てはいられない。

時々、背後の産室から、ファヨンの苦しげな声が聞こえてきて、その度にジュンスは髪をかきむしった。

一代われるものなら、俺が代わってやりたい。

本気でそう思った。

また断末魔のような悲鳴が響き渡った。

一体、どれだけ苦しんでいるんだ？

ジュンスはジーンズのポケットからスマホを出した。待ち受け画面は、彼とファヨンの結婚式の写真だ。

出逢いから四年経った去年の六月、ファヨンとジュンスは大学を卒業し、入籍した。

ジュンスは大学卒業後、大手の銀行に就職した。

挙式は行わず、上杉写真館で記念写真を撮っただけだ。一度目は純白のウェディングドレスとタキシードで、二度目のお色直しは韓国の伝統衣装、パジとチマチョゴリで撮った。

今、待ち受けにしているのはウェディングドレスの方だ。白いドレス姿のファヨンはとても愛らしくて綺麗で、ジュンスはまた惚れ直してしまった。一体、彼は妻に何度恋をすれば気が済むのだろう。それは彼自身にも判らない。

そして、今、ファヨンは彼の子どもを産むために闘っている。

彼はおもむろに立ち上がり、廊下の窓越しに外を見つめた。そこそこの大きさの病院の庭には今、桜が満開だ。薄紅色に包まれた大樹が丁度、二階の窓から見える。

だが、出産となると、彼にはあまり良いイメージはない。ふいに三百年前の悪夢がありありと甦った。まるでドラマでも見るかのように、あのときの様子が再現される。

大量の血を吐いて彼の腕の中で事切れた明姫。彼女は彼の子を宿したまま亡くなった。大切な女を失ったときのやるせない絶望感、怒り、哀しみ、喪失感がまたしても彼を苛んだ。

その不安を裏付けるかのように、ファヨンのお産もまた遅々として進まない。三日前に陣痛が来たものの、赤児が一向に生まれる兆しがない。

今朝になって医師の判断で陣痛促進剤が投与され、陣痛は強くなり、お産も幾ばくかは進んだとのことだが、やはり難産になるだろうと医師からは告げられている。

また、鋭いうめき声が聞こえてきて、彼は耳を塞いだ。

一またしても、明姫は死ぬのか？

頼む、そんなに母を困らせないでくれ、早く生まれてきてくれ。

お腹の赤ん坊に祈るような気持ちで話しかけた時、ひときわ悲痛な悲鳴が響き渡った。

ジュンスはハッとして立ち上がった。

何故か胸騒ぎがしてならない。

血を吐いて事切れた明姫の最期の姿がまたフラッシュバックした。彼の腕の中で、急速に力を失い、重くなっていった明姫の身体。か細い身体なのに、腹部だけは大きく膨らんでいて、その中には彼の子どもがいた。明姫はついに子を産むことなく、腹の子とともに埋葬されたのだ。

ジュンスは産室の中の様子を窺った。あれほど苦しんでいたファヨンなのに、今は悲鳴も聞こえない。不気味なほど中は静まり返っている。

これは何か良くないことがあったのではないだろうか。ファヨンの様子が急変したとか。

ジュンスは居ても立ってもいられず、何があったのかと室内に踏み込もうとした。

—その瞬間。

早朝のしじまを破って、力強い赤ちゃんの泣き声が響き渡った。

「一生まれた」

ジュンス(ユン)の瞳から透明な涙が流れ落ちた。

—私は何度生まれ変わっても、この広い世の中から、あなたを探し出し、恋をするわ。

明姫の今わのきわの科白が耳奥で甦った。

今、漸く本当の意味で、想い人と我が子は彼の手許に戻ってきた。

彼は三百年かけて彼の子どもを産んでくれた妻の労をねぎらうために産室に入った。

「おめでとうございます」

「おめでとう、二千八百二グラム、元気な男の子ですよ」

数人の看護師と医師が口々に声を揃えて祝福してくれる。物問いたげなまなざしに、医師がにこやかに応えた。

「母子ともに健康、奥さんも苦しみましたが、よく頑張りました。促進剤を使ってから、かなり強い陣痛が来たんです。褒めてあげてください」

彼は産褥に横たわった妻に近寄り、髪をそっと撫でた。

烈しい苦悶に喘ぎ憔悴はしているものの、妻は大仕事を成し遂げた後のような満ち足りた表情をしていた。

「やっと逢えた、あなた(ユン)と私(明姫)の赤ちゃん」

ファヨンの瞳から、つうっとひとすじの涙が流れる。ジュンスはその涙を指の腹でぬぐった。

汗でファヨンの前髪が額に貼り付いている。ジュンスはファヨンの乱れた髪を優しい手つきで直し、そっとその額に唇を落とした。

「ありがとう、最高のプレゼントだ」

彼の生涯の想い人は涙ぐみながら頷いた。

(完)

あとがき

今月は予定を変えて、飛び入りの作品を書きました。実は先月に現代物を書き上げた直後に、ふっと浮かんだネタです。

きっかけは、久しぶりに韓流時代小説『何度でも、あなたに恋をする～後宮悲歌』を思い出したことでした。今から丁度一年前、完結した愛着のある懐かしい作品です。

思い出して所々読み返してみましたが、哀しいー。自分で書いていて、ラストの明姫が亡くなるシーンを描くときは泣いた記憶はうっすらとあるのですが一笑、やはり一年経っても、哀しい話です。確か一旦完結してから、あの終わり方ではユンがあまりに可哀想だからと第二部を書いたのです。

明姫にそっくりな女の子がユンの新しい王妃になるという設定でした。

あれから一年以上が経ちました。そしてまた読み返してみて、今度は明姫があまりに気の毒だと思いました。そんなことを言っていたら、キリがないのですがー。それでも、何か二人のその後の話を書かすにはいられませんでした。荒唐無稽だと思われるかもしれませんが、作者としては、明姫の身代わりなどではなく、彼女そのものにもう一度、最後の最後でユンと幸せになって貰いたいと考えたのです。

従って、一年前、後宮悲歌をご覧下さっていた方々にはご不満があるかもしれませんが、『これが最後の完結編』です。読んで下さった方の中にお一人でも、この終わり方が良いなと思って下さった方がいれば救われます。

今回の話を書くに当たり、本編を再度ひもといで読み返しつつ描きました。二人にもう一度会えて愉しかったのですが、やはり難しい面もありました。この話を読んだだけでも愉しんでいただけるようにというか理解できるように極力工夫したつもりでも、やはり、限界があると思います。

その点がいささか心配ですが、作者としては、こうして幸せな二人を描くことができ、幸せでした。

この機会に作者自身ももう一度、二人の物語りを読み直してみるつもりです。

それでは、今回もありがとうございます。

2014/08/22

最初に出逢った日のように～一片丹心・300年の恋～

<http://p.booklog.jp/book/89327>

著者 : megumi33

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/megumi33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89327>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89327>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ